明治十八年初刊

女學雜誌

每月廿五日發兌

第四百七號

社説

評論

女學

隨感

燗煥

片々

明治二十八年二月二十五日發兌

前號目次

前々號目次

新刊報告

四季の進物

無類の佳品

樂眞子　池田晃淵君著

大奥の女中

大奥の女中とは何ぞ、曰く徳川幕府累世の御臺所御生母御乳母乃至老女中臈侍妾等の謂なり、何の爲に此著ある、曰く徳川時代政局の内秘を暴露し一は以て史家の考證に資し、一は以て天下後世を戒飾せんと欲するなり、凡そ世の治亂政の頁秕を說くもの必ず先づ宰臣の能否を察す、然れども是れ唯外面皮想の見のみ、若し夫れ仔細に裡面を觀察せば概ね當時女流の顧盼如何に在て存す、是を以て内助其の道を得れば則ち政治り、然らざれば則ち國亂る、女流は則ち政局の大動機なり、治亂の大主因なり、原動者なり、德川氏三百年の治世亦全く大奥と御側御用人との天下なりしなり、本書、名は大奥の女中なりと雖も、著者の意は則ち政局の如何に在り、試に記事の大要を摘めは左の如し

●各代將軍の性行嗜好能事●春日局お萬の方桂昌院殿北の丸殿左京の方をすめの方其他各代の女流十數人の素性來歷性行勢力●大奥向の大秘極密●松平樂翁久世大和守當時の施政●酒井大老の私曲及び親王家擁立の野心●堀田備中守の抗論立身及び其末路●綱吉公入營の顚末●柳澤吉保の全盛●賄賂の公行●財政の困難●殺生の禁斷●僧侶の跋扈●惡貨の鑄造●天災地變●歌舞伎能樂の盛行●京風の流行●近衞太閤の下向●甲府公呪咀の虛實●水戸黄門の入智惠甲府公の伴病及養君入營の事●間部詮房の生立●新井白石と林信篤の軋轢●禮樂制度の改革●白石の上京大禮拜觀及朝鮮信使應接の顚末●諸商人の大奥と結托停止の事●其他百姓一揆●殿中刄傷等内外細大の出來事數百千件

上中下全三册
優美大和綴上製
挿畫雅麗極彩色
正價一册卅錢
郵稅六錢宛

發兌元　東京神田裏神保町　冨山房書店

支那學

十三經二十二史ノ浩瀚ナル事攻ノ士尚之ニ苦ム本誌此ニ概スルアリ分科修學ノ法ヲ畫シ部類ヲ分ツ五曰ク經學以テ聖經賢傳ノ根底ヲ穿ツ曰ク子學以テ支那哲學ノ淵源ニ溯ス曰ク史學政法經濟三千年ノ歷史紙上ニ躍如タリ曰ク文學支那ノ精華タル文學ヲ解剖シ分析シ明瞭痛快而メ漫錄文苑ニ至テハ東西諸儒ノ講說隨筆及ヒ詩文ヲ滿載シ一轉春花爛發ノ觀アラシム凡ノ此等ノ者一アル尙文學界ニ雄視スルニ足ル而メ本誌悉ク之ヲ收ム何等ノ奇觀ソ而メ講師ハ皆ナ當世ノ碩儒ナリ中途發刊讀者ニ背ク如キハ本院微力ナリト雖豈ニ敢テセンヤ

●經學○周學（文學博士島田重禮君）○宋學（大野雲潭君）○明學（學士會院會員三島中洲君）○陸象山（宮内默藏君）●子學○先秦諸子（牧野靜齋君）○漢唐諸子（山田濟齋君）●史學○日本儒學史（安井小太郎君）○和漢通交史（文學博士星野恒君）○歷史地理（前大學敎授久米邦武君）○貨幣史（竹添治三郎君）○正史小評（池田蘆洲君）●文學○本朝漢文沿革史（文學博士重野安繹君）○文章學（華族女學校敎授土屋鳳洲君）○文學史（兒島星江君）○詩學史（長尾雨山君）○詩學（佐藤六石君）●漫錄文苑

本誌二十號完結

第十號既刊

略則

毎月十五日一回發行○定價壹部前金九錢○五部四十三錢○十部八十四錢○廿部壹圓六十錢○郵稅毎册壹錢○郵券代用一割增○爲替ハ飯田町へ振込マルヘシ

發行所
東京市麴町區飯田町五丁目十五番地
漢文書院

俳諧史傳

明治二十七年の新書中、最好の世評を得たるは此書なり

俳諧を談ずるの新書中、此書の如く精細なるは稀なり。

和裝美本定價三十錢

郵稅一册ニ付四錢

女學雜誌社

女學雜誌

明治二十八年
二月二十五日發兌

第四百七號

社説

大國民の氣宇

地圖を展べて領土の小きことを歎ずる乎。然らば、一身を起てて万象を寰視せよ。汝が靈長たる所以のものは、形の大なるに由らざるにあらずや。夫れ國家の能く大なるは、必らずしも、地積の廣ろきが故にあらず、人口の多きが故にあらず、兵器戰艦の備はれるが故にあらず、必らずしも富にあらず、必らずしも山川にあらず。其の能く大なるものは、實に國民彼等自身が大なるの故にあり。國民の大なるとは、何をか言ふ。他なし、國民が人品德格の偉大にして、氣宇、大人物の度量を存すること、是れ也。

地を離れて山なきが如く、人を離れて事業あることなし。事業の根柢は人なり、事業の精心は人なり。人にして其人たらずんば、惣ての事業立どころに廢す。其の形骸は存すべし、其の法式は遺るべし、精髓に至ては既にあることなし。事業ありと云ふと雖ども、實は無きにひとし。

假令ひ、國家、地を領すること世界の半に達し、民を合はすこと人類の過半に及ぶことありとも、其の國民にして、大人物の氣宇を存することなくんば、此の國家や未だ以て大國と稱すべからざる也。日本は、外形に於ての大國たらんとする乎、精靈に於けるの大國たらんとする乎。最先、此の問題を決するに既に亦た大國民たるの奮發を要す。

憫れむべし、支那四百餘州、廣褒万里、民四億、千古稱して中華と誇ると云ふと雖ども、眼前の末路既に彼が如し。神洲の民は決して、如斯きを多とせざる也。支那を征し、支那を啓導せんとする所ろの日本國民は、固より如斯ならんことを欲せじ。

人世の精華は大人物なり、万國の生命は大國民に存す。大國民出でずんば、世界の進歩を何如んせん、大國民起らずんば

宇内の大道を何如んせん。偏僻して一方の長を爲すものは、或ひは之れあり、覇威を振つて權勢を熾んにするものは、或ひは之れあり、大國民なかる可らざるの使命は、別にあつて存す。夫れ、天が下に天國を開き、國の間だに人道を布き、眞平の太平を維持して、公義大德を振張する所以のものは、大國民にあらずして何ぞ。

大日本、國を建ると悠遠に、德を積むと深長なり、一旦、天機開けて、今や、日東の聖地に起てり。抱負する所ろ、須からく、大國民たるにあるべし。何んぞ、拘々として、小勢細利に溺るゝとを爲さん。憫れむべき、朝鮮國の爲めには、眞實に大俠を以て任ずべし、巧みに公義の名を假りて、他の悲運を利用せんとするは、大國民にあらず。憫れむべき、支那國の爲めには、眞實に師父を以て任ずべし、暴りに卑み法外に輕んじて、他の迂弱を罵しらんとするは、大國民にあらず。弱は固より憫れむべし、迂は固より導びくべし。故に、强暴のものは、斷じて挫ぢかざる可らず。蠻野の勇は、討つて懲らさゞる可らず。單に成敗利鈍に顧慮して、大道の爲めに國を挺して任ぜざるは、大國民にあらず。

世界の歴史多からざるに非ず、邦家の起立稀なるにあらず、然れども、審びらかに察て、能く大國民の氣宇弘量を開示したりと覺ゆるものに至ては、殆んど無し。今や、西洋の諸國、道義高からず、文化聖ならざるの時に當りて、天則はち我國を起こして、其が千歳に蓄積せる大義公道の粹華を煥發せしめんとす。國民、何んぞ感奮して大人の氣宇を世界に顯張せざるや。

多少の戰捷に狂悦し、幾分の占領地に暴負し、俄かに驕りて大事易々たりと思はんものゝ上には、天や暫らくにして、大失望を下すべし。曩に、徒らに因循せしものは、今は、暴りに輕進すべし。彼の躁々忙々として、波動し風轉するの輩は、必竟、もみがらの如し、帝國何んぞ此の輩によつて重きを爲さんや。

夫れ、帝國臣民が、今の機會に於て、大いに感奮興起せざる可らざるものは、其の能く支那に打勝ちたるが爲めにあらず、支那に打勝つべき使命を負はせられたるの所以にあり、支那に打勝つべく引出されたるの機會到來せる所以にあり。則なはち、大日本は、其勝つと勝たざるとに關はらず、方今東洋

大に動き、以て全世界に一變動を與へんとするの聖機に際會するに至りたる、即はち是れ大日本が、特有無類の天職を盡すべき責任を負へるを證す。此責めに當らんもの、大日本を措いて他の何處にかある。

左れば、日本國民は、其の戰勝の故によつて譽れを得ず。此の聖機の大任を盡す所以を多とし、其の戰勝の故によつては、彌よ自から警戒し、深く天に畏れて、前途一層の大任に忠ならんヿを期すべし。戰勝、そも／＼何程の祝事ぞ。支那人を殺ろし、支那末路の英雄を苦しめ、支那大領地の皇帝、泯潛として御衣を沾ほすの事を憶ふに於ては、大人の意中、豈に物の哀れに斷腸千回の憂ひなからんや。帝國の使命や、前途洪遠なり、僅かに支那國に勝ちて、狂賀するが如きは、何等痴小の局量ぞ。

大國民には、情けあるべし。大國民には、驕るヿなかるべし。大國民は、公義の爲めに憤ふるも、利益の爲めに狂うヿなかるべし、大國民は、天を敬す。大國民は、公道を重んず。大國民の眼中には、世界あり。何んぞ、區々として初めより境壁を設け、徒らに危懼して、合從連衡の痴策を立てん。弱きには、慈悲あるべし、強きには、賞讃すべし。細々たる市井の俠は、邦家の事にあらずと雖ども、人類に加擔しては、宇内を敵とするの大俠あり。暴は挫き、勇は勵まし、美は崇め、眞は發らき、道義を根柢として、德化を四海に及ぼすの慨あるべし。

凡そ此等の抱負、皆な大國民の抱負たり。日本は大國民たらざる可らず。故に、國民は、大人の氣宇を以て自から修めざる可らず。個人、小人の輩にして、國家何によりて大なるヿを得ん。吾黨は、同胞が更に自重するヿの渥からんヿを祈るもの也。

新年雜咏　　琴城

中興德化逐年新、絶海版圖即順民、今後移栽櫻万樹、
東西相賞一般春。
世途官海幾沈淪、何幸餘齡踰六旬、今日百憂消散盡、
一窩安樂小仙人。

評論

當年の紀元節

花火すら、其の燦爛たる一と時の眺めよりは、之が準備に費やす時日の方、遙かに長し。玉泉の噴出するは、多年、多方の水の流れ、地下に浸潤し竄透し曲行し忍續し、久しふして後ち初めて牢獄の土中より脫出奔騰する也。一火、一水にして既に斯の如し、偉大なる光景の現象に至つては、更に偉大なる準備蓄積の結果ならずんばあらず。孰か、天地間に偶然の事ありと言ふ。偶然とは、因緣を知らぬ族の臆測なり。懦弱の輩、やゝもすれば僥倖を賴みとす、然れども、嚴然たる天地間の道德には、曾て僥倖なるものを許せしとなし。餘慶は、積善に發し、不運は、否行に伴なひ、父子兄弟の緣みによつて、其德を遺傳するとともに、其の災を遺傳することやあらんと雖ども、遺傳の則たる一個嚴烈のものとす。天の法則に遺算なし、髮毛一莖と雖ども、倘ほ算へらる。報酬の理わりを疑がふものは、天帝を信ぜざるもの也。

世人往々、維新後三十年の文明と言ふ。然れども、文明豈に容易すく買收するとを得べけんや。方今の文化を以て、單に維新後西洋學術の致せし所ろとなすものは、因果を知らざる也。日本、立國三千年、德川の治世三百歲、蓄積する所ろ、鍛煉する所ろ、尋常ならんや。西洋の文明は、其形を移さしめたり、形や、時勢と共に變遷すべきもの耳。然れども、其の精髓に至りては、僅々三十年月の豈に容易すく造出する所ろならんや。淵源する所ろ、地の底にあり、流出する所ろ、年の昔にあり、次第に養なひて、次第に積めり。新日本の煥發は、一代の製造にはあらず。

請ふ見よ、陸海遠征の將士が、連戰連勝の偉大なる功績を。啻に其の勝つことの非凡なるのみならず、其勝ち方の麗はしさよ。勝ちたる後の更に麗はしさよ。此は是れ、大日本の武士が、物の哀れを知り、大丈夫のけなげさを辨まへて、生命を鴻毛の輕ろきに比し、義を泰山の重きに托し、型を千古の勇士に鑑がみて、譽れを万世の知己に賴める、殊勝なる武膽のすが〳〵しければなり。若し夫れ船艦の大を以てせば、敵

するゝ能はず、器械の精を以てせば、敵するゝ能はず、兵の多を以てせば、敵するゝ能はず、糧の饒かさを以て、氣候の耐忍を以て、地の利を以て、國民の近きを以てせば、敵するゝ能はず。このもろ〳〵の敵しがたきを以てして、而して能く敵して能く大に打勝つ所以のものは、別に一大靈威の吾に存するありて、万代の精神を今に當つて大いに煥發するが爲めにあらずや。忠勇の氣、万國に秀づ、武膽、列邦に優る、先人先輩が、數十百世に於て蓄積したる所ろのものは、今や時を得て隆んに揚發する也。

此に至つて、當代の吾等は、惣べての先人があらゆる勞苦を感謝す。青史の垂るゝ所ろ、野乘の記す所ろは、其の万一のみ、無名の英雄、無名の君子、無名の献身者、天然に無名たるべき犠牲の主婦は、各自使命をつくして、其が無名の地に於て沈々として勤勞したり。而して、此等勤勞の結果は、其の史乘に記載せらるゝと否と、人言の傳ふると傳えざるとに關せず、天地報酬の理法に於て、一點一畫の廢せらるゝとなし。其勢力は、如何なる形態かをもて、何處にか貫徹し、エ子ルギーは到底不滅にして、必らずや影響を遺傳せり。此に

於てか、此の知られたると、知られざると、名あると無きと皆な相ひ混和し、綜合し、抱着し、結晶して、遂に以て、現今の日本を造れり。現今の日本人は、先代の惣ての日本人が子孫なり。血肉、遺傳せるか、感化、遺傳せるか、無意識、遺傳せるか、一代の大風雲。遺傳せるか。遺傳の形躰は之を知らず、然れども確かに遺傳せるとに至ては、確かに知る。嗚呼、吾等は、先人の子孫なり、先人の後嗣なり、日本の今日あるを以て、惣ての先人に向つて感謝せざる可らず。故に先づ第一の建國者、紀元の偉人に向つて、尤とも熱き感謝を捧ぐ。

顧つて惟んみれば、當年はこれ第二の紀元なり。過去は、日本の建設なりき、將來は、世界に對する日本の活動なり。日本が、其の多年蓄積する所ろのものを提げて、坤輿列邦の正面に出臨し、其の國粹を發揮して、全世界に一道の新光輝を射入せんとするや、今は即はち其の開始なり。第二紀元とは方今の謂なり。

左れば、今人が先人を見るが如く、後人は亦た先人を見ん。願はくは、今人が先人に感謝するが如く、後人をして、今人

に感謝するとあらしめよ。今人、感謝を希ふにはあらず、感謝に相應しからんとを希ふ也。嗚呼、同胞よ、人事、一世に影響し、一世、万代に影響すべし。たとひ吾等個々眇焉たりと雖ども、一言一行は、空に消ゆるものにあらず。凡そ、人の爲せし事功は、如何に小なりとも、如何に聞えずとも、皆な歴々として天地の大帳簿に印刻せらる。豈に安くんぞ、人生の進退に關わりなしと言はんや。心臟の一脈を打つ所ろ、齒舌の一語を發する所ろ、一手の風を動かし一足の地を踏む所ろ、必らずや、万代に影響す。これ、豫言者の明らかに示す所ろ、理學者の明らかに證する所ろ、宗教の感念、道義の感念、人情の感念の明らかに告ぐる所ろ、先代之を證し、現代亦之を證す、何をもてか疑がはん。請ふ、今人をして自から輕ろんぜしめず、後人をして長く恨ましめず、願はくは、先人に感謝するの心を以て、現在の紀元に盡さん。

國無常强、無常弱。奉法者强則國强、奉法者弱則國弱。燕王之氓社稷也而荊以亡。齊桓公幷國三十、啓地三千里桓公之氓社稷也而齊以亡。燕襄王以河爲境以薊爲國、襲涿方城、殘齊平中山、有燕者重、無燕者輕、襄王之氓社稷也而燕以亡。……韓非子。

意外のめうと心中の夫婦

鎗の權三が妻

逍遙子が『天の網島』の細評を讀みてより、巢林子が事、更ためて戀しくなり、枕頭に近松世話淨瑠璃の集一卷を繰反して、或夜ひとり物思ふさびしさの慰さめとなす。讀んで『鎗の權三重帷子』に至り、悲感、胸に凝結し、おさゐが姿、眼前にちらつく。悒々しと、あかし吹消し眠らんとすれば、心切りに動きて、人に引かるゝ思ひす。實にや、おさゐは、活世界の女子なり、一生の悲運、現實の苦腦にからみ、哀れをかこつ斷腸の涙、わが熱胸の邊りに落ちかゝるの心地す。嗚呼、おさゐ。吾は、汝をあはれむ。

道樂のなぐさみは、多情なる男子のみに限るものかは、操を守るとを知り、亦た之を破らんとするにもあらぬ無垢の女性が、試ろみに他の情を引寄せて、暫らく弄あそび、餘まりに近づかるゝに喫驚して忽まち身を反らすなど、必らずしも老狸舊狐の世ずれたるのみが爲すとにあらず。生れて快活の氣質を稟け、長じて多血多恨の情はあり乍ら、片くろしき親兄

弟が厳めしき取なしにて、堅氣一方の男子に終生を寄せなんとき、滿腔の花未だ曾て開き盡すほどに開かず、心底のかほり未だ曾て酌み干すほどに酌まず、律義以外のおもしろみも發せざれば、鬱するとあり、三度の食事の外、お茶菓子の味も亦た格別なる思ひ、兎角に物足らぬ情けの恨思なくんばあらず。如斯き婦女子と雖ども、固より節操の重きとを知れり何を苦しみてか、自から破道の人とならんや。自から破道の人とならずして、而して往々意外の誘惑に落ち行く所以のものは、暫時の遊興にたわぶれて、虚が眞となり、思はぬ淵にちらり姿をうつして、遂に其の姿を抱かんとして身を投下す。物の哀れは、人情に存する不可思議の弱點なり。

彼れおさゐ、堅固廉直なる生得かたぎ、岩木忠太兵衞を父とし、父に劣らぬ若武士、武藝自慢の甚平を兄としながら、無言素朴の父兄は、妹女をして代つて多言艶麗たらしめやすく、氣合ひは伊達に、物好きよく、きやしや骨、ゆかしく、年よりは若く生々しく見えたり。左れば、茶人の妻となれ共、風流のさびに閑寂の愼しみは凝めず、はしたなく下男下女を叱りて、庭の手入に八釜しき質と覺ゆ。良人が留守に、家内、騷々しく、娘が髷をなほして、母の口より阿房口を叩き、飯炊の杉まで坐敷によんで、きりよう自慢のはなし聲高く、「女子でさえしん氣がわく、裸身をむつくりと抱いて寢たい」と雜言せしめて、只だ笑ふのみ。

良人市之進は、文武兼達の士らひなるべし。良人、家に在りては、作法行儀いかめしく、近よりてなれ〳〵しく、大口をひろぐ相手もなかるべし。彼女に存する一片の道樂氣は、寄するに人なく、四角四面がぢれつたく、偶まには思ふ存分の鬱散を爲したきなるべし。則はち、良人の留守は、下女の相手なり。十三の吾が子娘にすら、男の話を聞かせんとす。娘の美くしきを大抵の男に添せるは妬ましく、笹野權三を外の女に添せるは尚ほ妬まし。娘の爲めに妬ましきも、權三の爲に妬ましきも、同もに多情の妬みなり。妬みと言はんより、吾が情を漏し盡さざるの遺憾、遺憾を無意識に恨むの羨戀なるべし。『器量は、お國一番、武藝よふて、茶の道も弟子衆に續くはない、そして氣立と云ふものが、万人にも憎まれぬ、可愛らしい堅氣』と。あゝ、いとしらしき堅氣。これ此般女性の理想男子ならめ。浮氣は、堅氣を好めども、堅き堅氣は

満足しがたし。意氣にして、高等、人柄にして、凛としたるこそ、趣味ある多情婦人の好きものなれ。『榮耀いはずと殿御にもちや、そなたが厭なら母が男に持つぞや、ほんに市之進殿と云ふ男を持ねば、人手に渡す權三樣じやない』誰か、之を一時座輿のざれ言葉と云ふ。ざれの如く、本氣の如く、戯むれの如く、誠の如し。無意識に發して、有意識に打消す。有意識に於ては、夫ある妻なり、娘に善き婿の取りたき母なり、無意識に於ては、いとしらしく、可愛らしく、慕はしく、寄り添ひたく、彼我の如何なる資格かは分別の外にて、たゞ自然に吸入せられ、自然に同化せんとするこそ、陰陽不思議の妙合なれ。

『今も今とてお噂申せし折から、かう申せばどふやら、臺子の傳授と替々にする樣で、娘の威もおち、大事の傳授の詮もなし、夫はそれ、是は是の談合で、菊を其許へ進ずれば、婿は子の相傳、市之進聞れて滿足、第一私が戀婿』其の辯ずるや義理明白、筋道シャンとして、賢女の聲音凛々しきと見れば、忽ち、ちらとほのめかすは、地體の他の一種の情にてあり。『疾から外に約束が有るそうな』と、忽ち邪推すれば、忽ち嫉妬。『あつたら男に戀がさめた』。戀とは、抑そも誰が戀ぞ。娘の爲めに擇むとは、正氣の沙汰のみ。一度び激すれば、忽ち自己本性の妬みに還らざるを得ず。

端なく聞ける權三が他し人との契り、愛娘の善き婿を惜しむにあらず、娘の爲に惜しまずして、誰が爲めに惜しむ。家内寢しづまり、路次ほのぐらく、露は螢の思ひをもやし、蛙の聲はかまびすくさびし。夜はしん／＼として、流れ水の音もよろ／＼とひゞく。おさゐは獨り椽先にあり。

涙も袖に落次第、エヽ、思案する程妬ましい、大躰の男を可愛い娘に添せうか、わが身が連添ふ心にて吟味に吟味、思ひこふだ稀れ男なればこそ、大事の娘に添するもの、悋氣せずにおこふか。晝の婆めが吐し頬、お雪樣に權三樣と、內證志やんと締めてある。エヽ、腹が立つ妬ましい。悋氣ものとも法海とも、云ひたか云へ。傳授もへうたんもなんのせふ。臺子の茶釜もへちまのかは。エヽ、恨めし腹立やと、身を椽げたに打付て、こぼす涙の袖束、絞る茶巾のごとくなり。ハアーア、思へば悋氣も因果か病か、是れ程悋氣深ふては、我男を手放して、海山へだ

てゝよふをくぞ。能々お主は怖いもの、みな心の氣隨から。姑と婿の悋氣とは悪名の種、さらりと思ひ忘れふと、拂へ共猶ほ胸こがす。涙は癖となりにけり。

權三、供をも具せず、獨り夜をそく來る。おさゐ、人寢しづまりて、ふたり忍びて數寄屋へ這入る。傳授を與へんが爲めか、腹立を口說かんが爲めか、口說くは娘の爲めか、わが爲めか。二人忍ぶは、善き事ならず、善からずと知らずか、知らんとするの餘裕なきか、知るもムシヤクシヤ腹か。何の譯もなく、何の定めもなく、たゞ妬ましさ、腹立しさ、追返す如く、引張る如く、あらゝかに、ひつそりと、手燭片手に先きだちて案內す。

嗚呼、此の一刹那、万事休んぬ。數寄屋に入るは、魔室に入る也。何んぞこれより以後の變化を問はんや。禮は、器械的のものにして、亦た之より精神的なるはなし。幾多男女の救ひ、意味なき虛禮に原づけるを知らずや。一とたび境を超ゆ滑落數千丈、遂に支へがたし。悲しむべきは、數寄屋に入るの一刹那なり。

悪まれ男、不男の小人、己がきりようを知らぬ己惚れ男、我が戀の成らぬに意趣を反し、庭に投げたる二人の帶を證據、市之進女房笹野權三不義密通の言ひ觸れせんとす。

權三は玆に至るも、素地純白なり、直ちに割腹して武士の面目を維持せんとす。見るべし、おさゐ、何等の複雜、何等の痴情。貞心、戀思、うはき、决心、不道理なる覺悟に貫ぬかれて、珊瑚とにせ玉の珠數をつなぐ。

エ、是非もない、最早や此の二人は生ても死んでもすたつた身、東都にござる市之進殿、女房を盜まれたと、後ろ指をさゝれては、御奉公はおろか、人に面は合はされまい、迚も死ぬべき命なり、只だ今ま二人が密夫といふ不義者に成り極めて、市之進殿に打れて男の一分、立てて下され。

不道理なる道理、馬鹿らしき義理だても、人間多少の下心あつて、曲事未遂に破れ、忽變激率として、何が何やら分らぬの時、此の如き思ひ迫まりは、即はち眞の人情なり。

ヲ、いとしや口惜いは尤もなれど、跡に我々名を清めては、市之進は女敵を討誤まり、二度の恥と云ふ物、不肖ながら今こゝで女房じや、夫じやと一言いふて下され

権三はこゝに至つて、何の冷靜たる判別かあらんや。均しく是れ痴狂の人耳。然ど、おさゐは、倘女らしき眞情を吐り、命を果すお前もいとしいはいとしいが、三人の子をなした廿年の馴染には、私や代へぬぞと。

無念の男泣。女の泣きくづをれ。絶躰、絶命、思案の分別あらんや。是非がない、權三が女房。お前は夫。エヽ〱忌々しいと縋り合ふ。合ふぞ、一種の電氣なれ。落付ねども、少しは落付き、他人なれども、はや床しく、道行か、討れに行くか、義の驅落か、道樂の首尾か。五里霧中に彷徨して、進退出入未だ決せざるの時、一と度びすや〱寐入る子供を振切り、二た度び表て門の傍より逃れて、茲に初めて密夫駈落の第一步を現實になしける。之より以往、墜落する耳。墜落情を生み、情は義を追憶せしむ。

北の橋々上に、知らぬ振して見逃す人、橋下見上げて態々討れに上る人。橋の眞中は、人生の途切れなり。

嗚呼、世間幾多の女性、おさゐに似たるもの少しとせず。節なるか、貞なるか、多情なるか、浮薄なるか、行路の岐、一寸の情より分れ、千秋の恨み、羞恥の放却よりきざす。貞婦、姦婦、步み一步のみ。人間の罪、偶然の調子より起る。誰か、杓子をあげて定規となし、活ける流動の血を物さしにて度らんとするや。罪人の惡しきは、惡むべくして、可愛らし。思ひ切まりて身を落すの族、何んぞ同情を涙あるものに求めざる。つく〱と、多情の女性を懐ひて、思ひ遣ると切なり。

獅子のくるふも舞ふが爲めとか、菊花淸脱の蘂に異形の狂態なからんや。靜まれよ〱、多恨多血の女子、淸戀は、形骸の外にあり、熱愛は、默して忍ぶに存す、悠々たる味はひは、心にしめて、密に味はふべきものにあらずや。

日本基督教の第二期

基督教に對する軍人の態度は、近き一二月の間だに於て、激變せり。何が故に斯の如く激變せしかの由緣に至ては、未だ容易すく測知するを得ず。然れども、其の由緣の何如なるかに關せず、軍人が態度の俄然として一變せし事實に至ては昭々明々たり。

蓋し從來基督教の宣布に對する尤とも有力なる反向は、軍人

社會に於てありき。彼等は、尊王と、愛國と、勇猛と、かの基督教と相調和せざることを誤認したり。軍人にして此の誤認の故に反向す、軍人が反向は、反向中の至强なるものなりき。彼等は、直情徑行す、彼等は生ぬるきことを嫌ふ、而して、彼等は、一律整然、組織せる軍隊的の結合を以て、其の敵とする所ろに反向せり。

敵として强きは、味方として亦强よし。殆んど一整に反對したるものは、亦殆んど一齊に贊成すべし。基督教に於ける彼等が態度の如斯く激變せし所以のものは、惟ふに其の將來の影響に於て、更に之よりも甚しき激變を惹き起し來るなるべし。

此に於て乎、謳歌の聲、基督教界内に起り、讃美の歌到る處ろに高し。俄かに樂天の喜觀を增し、人々容色春にあへるが如し。忽然として、元氣出でたらんが如く、傳道の好望、千古類ひなきほどと喜こびあへり。

獨嘯子、喟然として長大息し、警戒の念ひ潮の湧くが如し。あゝ噫、日本の基督教も、既に早や第二期に入れる乎。苦練未だ足らずして、優遇にわかに到り、戰ひ尙ほ了えざるに、勳章既に下る。夫れ、將來の趨勢は、緩慢不振の態か。佛教は、新たに其侶を得たり、一般の基督教は今後只だ形式のものとならん耳。僧は、人を殖やすべし、寺院は、數を加ふべし、祈りの聲、說法の調、少しく進化すべし。左れど、全躰に於ける基督教の景況は、單に第二の佛教らしきものを造り出さんことにある耳。

惜しむべし、時世、妄りに寵を早くし、基督新教新宣布の道に於て、未だ嘗て著ぢるしき歷史を遺さしめず、殆んど意外迅速の容易きを以て歡迎したり。迫害とは、石を投ぐるか、小學校敎師の職を免ずるか、當路者が貧乏するか位ゐの事に止まりたり。新敎傳道歷史の第一頁には、血の滴たるあることなし、骨のくだけたるあることなし、肉の劈ざかれたるあることなし。僅かに一少年高橋傳五郎のあるありと雖ども、之すら多數人士の耳には左程の反響もなし。惟ふに、傳五郎が事蹟の、新敎歷史第一章中に記載せらるゝこと一二行にも足らじ、或は大抵は遺忘せらるゝなるべし。日本に於ける新敎宣傳の歷史は、長閑かなる春風三月の櫻ばなの記文なり。

女　學

女學に於ける姑

世間、姑を文盲に譬え、よめにくきを、先天の本色と見做して、只だ一概に無理我儘を言ひ張るものと評判するは、不當の見解なり。

嫁は姑にいぢめられ、苦勞氣がねに年の効を積みて、此度は自身、姑となり、則はち順番に返報をもとめて、息子の嫁をいぢめる。其の間柄は、宛がらいたちごつこの如しと言ふものあり。人を看下げたる見識なり。

親子別居の可否、容易すく論じがたし。孝子の情、何れをか採らん。嫁は到底姑と同居すべきものか、非か。すべて、此邊の問題を別にして、抑そも、嫁が敎化の上に於ける姑の勢力なるものは、大いに考ふべき價値あり。即はち、女學の上の一勢力として、姑の効果を研究するは、有益なる學問の種なり。

先づ眞先に、姑は、大ひなる警戒者となれり。『姑』と云ふ一語は、嫁が頭腦にエレキの如く響く。行くさきに、姑どのありと聞かば、帶を引締め、心を据えて、用愼するの覺悟、直ちに起る。故に、『姑』と云ふ一語は、嫁が惰弱の心を押さえ、其の輿入れの未だ濟まざる先にすら、既に刺激を與ふるの力あり。況してや、彌よ嫁ぎ、渠が娘となり、渠を母樣と呼びて仕ふべき關係となりたる曉に於てをや。姑の座はす室內は空氣重やかにして、何となく息氣のつまるを覺え、其の眼前にては、日光さやかにして、取わけ何處も見透かさるる心地す。蛙の蛇にすくみ、猫の犬に恐るゝ眞情は覺りがたけれど、殿樣御覽の前にて必死の勝負を爲し、來客數百の壇上にて大試驗の實地に當るなどは、蓋し此邊の思か。夜は、伏れども、足も十分には伸さず、寢ごとや言はじ、齒ぎしりやせじと、碌々安眠も出來ず。良人への昵づきも、現はすに容赦し、里への音信は、尤とも苦慮す。子供の躾はもとより、下女下男の仕打に至るまで、悉とく責任あり。舅も良人も、殿方なれば、お氣の付く所ろは、自から別途なれども、姑さまに限つて、徹細徹底の觀察力おはし、一種の檢査、物事の

奥にとうりて、寸刻も油断なりがたしと感ずるは、姑をもてる嫁が警戒の情なり。これ、嫁にとりて至大の教育に非ずや。人の惰弱なるは、朽ちたる木の如し、確としたる彫刻は出來がたし。心まづ警戒し、用心堅固に、事々物々を取扱ひ、仔細に工夫して、万づに慘憺たる經營を施こすときは、智力の進歩驚ろく可きものあり、實地學問の捗どり、之に超ゆるものはある可らず。今の女學生、最初よりホームは樂しみの受取處ろと心得、幸福を領收せんの覺悟にて、榮耀半分の怠け根性もて他家に嫁すると、天地霄壤の差ありと言ふべし。人生は、遊歩場にあらず、家庭は食つて寢ねべき豚小屋にあらず、之れに嚴そかなる意義あるとを承知して、智徳の鍛錬上達を最大の希望とするときは、泛々たる無經驗の乙女が兎角誤まつて榮華氣隨道樂ものとなり易き、傾向を遮止し、發程第一に、凛としたる警戒を加へて、愼しみたる用心をもつて、新らしき世界に入らしむるは、實に姑の感化力にあらずや。

此故に、家に姑ありて、其の監視を蒙むり、朝夕警戒して、苦勞、氣兼のうちに能く働らきたる嫁は、氣の付くと、神の如く、手早きと電の如く、腰の輕ろきと車の如し。骨惜しみせず、不拙せず、おしやべりせず、我儘を言はず、衣服の飾りを求めず、出遊びせず、良人に狎れず。只だ語るとを遲くし、行ふとを速くし、勤勉にして、惰弱ならぬを特質とす。必竟、みな、姑が教育の好結果たる也。

左れば、想ふに、古風の主婦が、大方勤儉の覺悟に長ぜしは、過半、姑が教育のお蔭なるべし。姑、嫁を教育す。此嫁また姑となりて、嫁を教育す。元と批評的に嫁を責めたるが爲めの教育も、此嫁すでに實地に鍛練して則はち經驗ある姑となり、其經驗を規則として更に其姑を教訓するに至るときは、既に確實なる教科となれり。凡そ如斯く代々經驗を積みて、女學の蓄積を加え、彌よ深切に後の嫁を教育す。古風の女學も亦た淵源する所ろ深遠なりと云ふべし。

故に、姑が與へたる第一の教育は、警戒の心なり。次で、勤勉、儉約、克己、奉公、などもろ〳〵の婦徳、皆な之より發生す。姑が、教化の力も亦た洪大なる哉。彼は、一種の教育者たりき。誰か、之を文盲人に比せんとはする。

然らば則はち、女學上、姑の感化力を研究し、其力の理法に

一教師の日記（一）

◉やんごとなき方ざま世を去り玉ひて、國人の歎き一と方ならず、則はち布達ありて、何日間、音曲歌舞を制止すとの觸れありける事あり。

此時、學校にて教授する音樂唱歌は止めべきや否やの評議ありけり。止めべしとの説あるに對して、某つらく思ふやうは、抑そも斯の布達や、幕府舊時代の名殘りにして、音樂唱歌など云ふものゝ、教育上に於ける價値毫しも知れざりし折の法度より傳はれり。令の主意たる、國葬大哀の情を表せんとて、遊戲の鳴物を禁じ、いとまめやかに弔らはんとの旨に外ならず。されば、教育上に於ける、音樂唱歌の眞の價値を辨識して、其が遊戲三昧のものにあらざるとを明らかにするは、則はち斯る時の一つの心得なるべし。左なきだに、此の二つは、兎角慰さみものと見做され易く純然たる必要の學科として識認すること覺束なきの今日、苟くも學科の神聖を護つて、其の功德を顯揚せんとするの教師に在ては、毅然、守る所ろを明らかにして、誓つて世上の誤まりを矯正せずん

則とるは太はだ有益なり。もし家庭の仕組一變して、姑は嫁と別居することならんには、素と嫁に與へたる姑的教育の効果は、他の何等かの別途によりて、代つて供給せられざる可らず。たとひ必らずしも、姑その人にあらずとするも、渠が施與せしと同効力ある感化の、他の教源より發することならば、女子は遂に其の鍛錬を成すの途を得ずして畢らん。これ、女學の爲めに憂ふべきものとす。

嗚呼、姑よ、姑よ。古來、汝は、惡まれものゝ代名詞となり鬼の親類と見做され、唯だ只だ嫁をいぢめる苛責の役を爲すものとのみ言はやされしこそ、氣の毒なれ。汝は、舊日本に於ける、唯一の女學教師なりき。汝なかつせば、女學なかりし也。玆に、女學に代つて、恭やしく汝が功勞を感謝し、併せて、其が相續者の、異名の下に長久繼續せんとを希がふと云ふ。

依違出レ門去、欲レ行復遲々、鄰廻盡出別、强語含二辛悲一。
去矣勿二復道一、已去還躊躇、鷄鳴尙聞レ響、犬戀猶相隨。
岡回行漸遠、日落群鳥飛、群鳥各有レ托、孤妾去何之。

ばある可らず。故に、學校の科業一樣に休止すとせば、則ち可なるも、殊更らに、音樂唱歌の二つをのみ休まんとするは、自から學問の地位を落して、其の神聖を瀆すものなり、敎育者の覺悟は、決して左る薄弱のものなる可らず。

故に、布達の主意に對しては、毫も遠慮を須ひず、決して、學校内の音曲を休むべき理由あることなしと雖ども、元來、弔意を表し、衆と共に深悼の情を奉ぜんとするの日や、衆にして、敎育上に於ける音樂唱歌の地位を識らず、而も、音響は同一にして、聞こゆる所、他の遊戯の輩が爲す所ろと、左して異なることなしと感ぜらる可き時世に在ては、國家が悼意を表せんとするの情に據て、別に顧慮すべき一事由あつて存す。音樂唱歌に對する衆の誤は、平常、之を矯正すべし、一大深悼の時機は、他事に利用すべきものにあらず。故に、衆と共にするの精神によりて、更に一種の思ふべき事あり。即はち、敎育者は、布達に循じて其の音曲を休止するにあらず、衆と共に悼むの情に於て、自から遠慮して之を休止するを、穩當なりとす。

幕府の時節、武士は、此機會に於て、其謠を制止せらるゝことはなかりしが、自ら遠慮して之を休めたりとぞ。余が心、大方之に近し。

◉物みな自然の境に達して初めて妙味あり。進みて此の地に到達せざるうちは、措置宜しきを得ず、自から究屈にして、圓滑完熟の安きを生じがたきものなり。敎育者が敎育に於ける、或ひは國家の爲めに大いに慷慨し、或ひは父兄の爲めに謹嚴に義務を感じ、又は英才の前途多望なるに快味を隆んにし、もしくは人生の悲慘なるに心を打れて慈悲の想ひに切まるなど、惣じて雄大、謹愼、鋭意、心切なる刺激に感動して以て其の聖なる事業に身を獻ずるの心を振ひ起こさんは、固より多とすべく、殊勝とすべきことなるは論なしと雖ども、未だ以て敎育者が徹底すべき妙地に達したるものとは言ふ可らず。敎育者が初め志を立てたる感動力は、蓋し當に此邊に存すべきなり。然れども、既に身を投じて此事に從がひたらん後は、宛がら是れ魚の水中に泳ぎ、鳥の空中に飛ばんが如く、應に自由に、自然に、氣樂に、平安なるべし。何んぞ必らずしも慷慨を第一とすべけん、何んぞ必らずしも謹愼を要とすべけん。子弟に臨む、敎師の如くならずして、父母の如

くなるべし。よし敎ゆべき學科の智識には欠乏すとも、尙もつて之に臨んで重きを爲し、彼も亦た尙ほ之に賴つて安きを感ずべき「或る一物」を存せざる可らず。子弟が此の敎育者に對するとき、其威嚴を見ず、其風采を見ず、其學識を見ず、別に一道の靈光あり、直覺して身を以て之れに感通すべき或る一種のもの彼に具備して、之を吸ひ、之を抱き、之に枕らし、之れに賴より、大舟に乘りたらんが如く、三軍に保護せられたらんが如く、安心して之に任かせ得るに至つて、則はち師弟間の活路通ず。子弟の心こゝに至つて初めて開展し、梅花の春にあひ、木の葉の光を見たらん如く、之よりして自づからに綻ろび、自からに伸張すべし。敎育上に所云る開發の極意、こゝにあつて存す。左れば、學校組織の如き、數多の敎師混同し、雜然として八方より諸種の智識を授業する場所に於ては、別に一人の校父あつて、授業の外に彼の一種言ひがたき中心の鞠育を爲さずんばある可らず、然らざれば、子弟を智識と云ふ一種の世波の中にて、もみにもみ上げ、之を親なき無情の學問界に投入して、偏僻片瑕者となすとを以て了らん歟。之を稱して、學校そだちの繼子と言ふべし。學

校に親となるべき人のなかりしが故なり。夫れ、心の根本を開かざれば、他の諸門を開くとも、眞乎に徹底せじ。たとひ、智育に於て開發の手段を採ると言ふと雖ども、先づ其の本元の心情に就て自由快濶に展開する所ろなくんば、亦たこれ一種の注入となつて了らん耳。繼子が、眞理に對して素直に公平なる知解を得るとの難きに比ぶべし。就中、子弟の心情未だ開けざるに方つては、德育上の聖化、眞誠に徹底するとなし、多くはたゞ外形々式のもののみ之に浸入す。之に言ひ聞かせても、義理々窟先づ覺られて、頭腦を以て判斷す、たとひ承服し服從すとも、其心底には未だ眞との悟入あらざるなり。寧ろ初めより心情に直覺し、一言呵責せらるゝの間に忽然徹悟するの眞となるに及ばんや。而も、如此きは、生平に在て、師弟間の活路開けたるにあらずんば能はざる也。嗚呼。此の妙地に達するは、初めや敎育者其の人の德躰具はれるが故にあり。敎育者にして先づ其妙品に達せずんば、之れを如何すとも術の及ぶべきなし。此事や、智識に由るにあらず、精神に由るにあらず、品格に由るにあらず、然れども、幾多慘憺たる經營の末、血肉積淚の密なる經驗の後ち、忽然とし

て茲に悟入し、身先づ安きを得て、則はち子弟に臨んで平々如たり、慈々如たり、愛々如たるを得るなり。之を教育者の『悟り』と云ふ。悟りのものたる、遂に言ひがたし、たゞ自から悟入するにある耳。

女學統計

●教科用書

各地尋常師範學校女子部教科用書取調略(女子高等師範學校調査の表に據る)

	修身	家政
大坂府	…………	…………
長崎縣	古文孝經。論語	家事要訓(前田)
新潟縣	幼學綱要(元田)。明治孝節錄(近藤)。孝經。教育勅諭衍義。朱子小學稽古篇。女四書	家政學(清水)。家計簿記法(藤尾)。
千葉縣	小學	
栃木縣	教育勅語衍義(那河、秋山)。婦女鑑(西村)	家政學(下田)。
山梨縣	小學。勅語衍義(那河、秋山)。	
山形縣	日本女鑑(風當)。幼學綱要(元田)。	
富山縣	孝經。論語。實踐道德學(能勢)。	家政學(清水)
鳥取縣	勅語衍義(井上)。	
島根縣	普通倫理學。女四書。論語。小學。	
和歌山縣	幼學綱要(元田)。勅語衍義(那河、秋山)。女子修身鑑(山井)。	

●師範女生の寄宿舍

各地尋常師範學校の甲、舍監。乙、家政。丙、義務。取調略(同前)

◎大坂府

甲　舍監二人。一人は女子高等師範學校卒業生、年齡廿二年十ヶ月、教科は地理、家事、保育、遊戯受持。一人は尋常高等家事科免狀所有、年齡四十八年七ヶ月、裁縫受持。

乙　家事練習の方法は、毎週交代にて炊事を實習し毎月二回放課後料理法を授け、洗濯張物等は隨時之を授く。

丙　寄宿舍內に於て生徒の負擔すべき事柄は、組長、副長、炊事係、掃除。

◎長崎縣

甲　二人。一人は尋常師範學校卒業生、年齡廿三年八ヶ月、教科ハ保育、裁縫受持。一人は私熟修學、年齡五十二年六ヶ月、教科は裁縫受持。

乙　裁縫洗濯、張物及養蠶の方法を習はしめ割烹の献立計算を學らしむ。

丙　各室及庭內の掃除並に點燈一切の事。

◎新潟縣

甲　三人。一人は女子高等師範學校卒業生、年齡廿六年二ヶ月、教科は家事、簿記、地理受持。一人は中等師範學校卒業生、年齡三十二年十ヶ月、教科ハ音樂受持。一人は共立女子職業學校卒業生、年齡は四十五年十一ヶ月、教科　禮式、裁縫受持。

乙　家政簿記、裁縫、作法(以上正課)。自炊、毎土曜日放課後料理法教授、味噌の製法、香物の漬方、洗濯張物(以上實習)。

丙　室內廊下の掃除、炊事に關すること。

◎千葉縣

甲　一人、師範學校卒業生、年齡三十八年八ヶ月、教科は作法、家事受持。

乙　衣服の洗濯、和洋食物の調理、物品購入、金錢出納、諸掃除。

丙　室內、庭園、廊下の拭き掃除及炊事。

◎栃木縣

甲　二人、一人は高等女子師範學校卒業生、年齡二十七年、教科は家事、作法受持。一人は雇教員、年齡四十八年、教科は裁縫修行。

乙　炊事、洗濯、掃除等家事科にて學びし所を實習せしむ。

丙　室長、順番に割烹に四名ヅヽ、洒掃毎朝洗濯、髮洗は土曜、日曜。

◎山梨縣

甲　二人、一人は東京音樂學校卒業生、年齡廿三年六ヶ月、敎科は音樂受持。一人は、履敎員、年齡五十五年九ヶ月、敎科は裁縫受持。

乙　每週交代炊事實習衣服洗濯掃除等。

丙　自習室、寢室、庭の掃除。

◎山形縣

甲　二人。一人は女子高等師範學校卒業生、年齡廿三年一ヶ月、敎科は修身、歷史、地理、家事受持。一人は小學校家事科免狀所有、年齡は三十二年六ヶ月、敎科は裁縫受持。

乙　出來得る範圍內に於て寄宿舍にて練習せしむ。

丙　炊事、掃除、食品簿調査、炊事日計表、仝試計表記載。

◎秋田縣

甲　二人。一人は男、漢文家事免狀所有、年齡四十三年一ヶ月、敎科は家事、漢文受持。一人は女、小學傳習科卒業、年齡五十五年六ヶ月、敎科は裁縫受持。

乙

丙　舍內、室內取締、掃除、炊事の會計及調理を爲す。

◎富山縣

甲　二人。一人は年齡四十八年八ヶ月、敎科は裁縫、禮式受持。一人は女子高等師範學校卒業生、年齡廿五年五ヶ月、敎科は家事、生理、保育、敎育受持。

乙　炊事規約に從ひて練習せしむ。

丙　室の內外の掃除、炊事。

◎鳥取縣

甲　二人。一人は女子高等師範學校卒業生、年齡は二十四年七ヶ月、敎科は地理、歷史、敎育、家事受持。一人は、鳥取師範學校卒業生、年齡廿五年四ヶ月、敎科は作法受持。

乙　輪番炊事に從事し張簿の整頓器具の整理、病人取扱衣服の洗濯を授く。

丙　炊事、舍內掃除、浴室整頓、器具整理。

◎島根縣

甲　一人。元松江女子師範學校卒業生、年齡三十九年一ヶ月、敎科は裁縫、習字、作法受持。

乙　炊事に關し精粗を鑑別し買入、金錢の出納を實習せしめ一年二回賓客を請し割烹の評定を受く。

丙　組長、週番、炊事、掃除。

◎和歌山縣

甲　二人。一人は女子高等師範學校卒業生、年二齡十五年八ヶ月、敎科は國語、家事、保育受持、一人は裁縫敎員免狀所有、年齡四十四年。

乙　輪番炊事に從事し、帳簿の整頓、洒掃應對等を習ひ日常の家政を熟知せしむ。

丙　自習室、寢室、廊下及ランプの掃除。

◉男女共學の得失（上）

各地の公私立女兒小學校に於て實驗上女兒を別に敎育するの得失調査畧表（同前）。

◎東京、柳北女子尋常高等小學校

得　淑德を養ひ且適當なる敎育を施すに便なり即ち修身科の事實、作文科の文題並用語算術科の問題（例へば家計に關する日常の計算）理科の綱目（生理、衛生、割烹）等女子に適當なるものを撰ぶことを得。

失　卑屈に流るゝの弊なきを保せず。

◎京都、尋常師範學校附屬小學校

得　淑德養成上、學業進步上に都合よし出校を好むに至るが如し。

失　認むべき點なし。

◎同、公立下京高等小學校

得　敎授上管理上女子に特別の注意を爲すに便なり。

失　認むべき點なし。

◎同、苑道尋常小學校

不調査。

◎同、與謝郡第一高等小學校

得　男女敎室を異にせしより日尙淺きを以て未だ著しき利弊を認めずと雖男女共學の時は或場合に於ては女子の男子に壓せらるゝ模樣あれども又引立らるゝこともあり且男女の別を立つることも甚だしからざりしが分離以來彼此別を立つること甚しきを覺え從來の勢よき風減じたるを覺ゆ。

◎同、公立宮津尋常小學校

得　修身唱歌躰操等敎授上に利益あり。

失　認むべき點なし。

日本の黃鶯孃

廣島に於ける看護婦

廣島英和女學校　栗　屋　七　郞

風雲一たび韓山に捲き起るや忽ち清兵の借入れ神兵の入城となり轉じて日清の葛藤となり牙山に清兵の敗亡となり豐島に清艦の轟沈となる、當時の廣島の狀を回想すれば我軍の先發なる第五師團の混成旅團が堂々肅々として出發せしは實に六月の末なりき、やがて戰勝の快報頻りに至るや漸く負傷者收容の準備は始まりぬ、衛戍病院には臨時の建增起り西練兵場に國泰寺村に白島に四ヶ所の假病院は建設せられ藁葺の病舍は忽然として地上に湧出て宛然秩序正しき村落の狀をなす(之れ露國一等軍醫正メトウイデフ氏の評語を借るもの)當時稱して三千の傷病者を收容し得るとなす其準備の壯大なる此一事によりても察せらる。次ひで平壤の占領黃海の大勝あるや戰地の病院も漸く狹隘を告げ御用船歸航每に歸朝傷病者相踵で至り軍醫部愈よ繁忙を極め開業醫の臨時雇入となり雇看病人の募集となる。之より轟戰期漸く迫り傷病者の處置其設備の急を要するや赤十字社は先づ理事首長始め多くの役員を送り看護婦並に救護員採用の事を協議せられ約成りて始めて東京本社の看護婦が第一着に着廣せられしは實に昨年の八月五日なりしとぞ、爾來幾回の大戰に傷病者の歸朝する者日々百を以て算するに至り各院殆んど充滿するに至るや從つて醫員看病者の大數を要する事となり各地の赤十字社支部より續々所屬の看護婦を送り今日に於ては其數實に百五十名に及ぶとぞ。今其配置と數とを記せば三十人は本院に八十人は第一分院に四十人は第三分院に於て働かる又其出發の場處よりせば東京府三十餘名京都府四十名岡山縣三十名にして其他は廣島愛媛長崎熊本の諸縣より來られし者なり之を年齡より記せば其最若き者には十八才の者もあるよしなれ共大概は二十才以上三十四五才までの最も壯んなる婦人にして其額上に經驗の波を漂はさるゝは少數の監督者たる老夫人のみなり。此多數の感ずべき婦人が孜々岌々として日夜勞苦せらるゝ處は如何なる場處にして其は如何なる時にして其事業は如何なるか。

勤め

去年の暮の事なりき我學校の學生諸子が奉公の片端にもと兼て願ひおきつる病院の繃帶も書讀む片手間にまき終て五百反あまりも出來しゆゑ三四の方を引連れて本院にと赴きける、折から午後三時過にて何人にも訪問を許さるゝ時刻なりければ諸子の全情の念も熾ならしめたく且は看護婦諸姉の働を見せ置ば他日の役にも立ならんと思ひ病室慰問の事を願ひしに速に許可を與へられ剩さへ看護長某君は案內者として數ならぬ我等の爲に万金の時間を割愛し給ひぬ、元來本院は重に將校の傷病者を收容する處にて其外には重傷の下士及び負傷俘虜をも其內に見受けたり、而して其一二號室は將校にして第三號は重傷の下士卒方なり中には成歡牙山の役に傷きたる方あり平壤九連城或は金州旅順にて傷を受し方あり實に長日月間呻吟せらるゝなり。偖て午後の事なれば醫官の診察もあらされば看護婦諸姉も日中最も閑なる時なりしならんに元より病者につける身の仲々に休息の時あるべくもあらず或は籍を携へてあちこちと廊下をいそがしげにかけまはらるゝあれば藥壜をさげて藥室に往來せらるゝあり、折から稍快くなられたる一將校あり病床を離れて今しも廊下に出でゝ新鮮の空氣と暖かなる日光を求め給ふあり足をや傷け給ひけん杖を力に遲々と廊下を逍遙せらるゝ背後に從ふは誰れぞ氣遣はしげに步々手を添へて猶ほ愛るが如き白衣の婦人なり前に嘻々として走るは父君の顏と危き足の運びとを見て喜び溢るゝ十一二と八九才の男兒なり日夜病床の傍にありて頭をもみ手を撫で便の掃除をまでなし吳るゝ親切なる看護婦風の朝にも雨の夜にも父君の傷や如何にと子供の狹き胸にも母の思を汲みわけ遙々日々訪れ來る我愛兒なり城を破り人を切る榮誇の如き心とて如何でか慈愛の淚なからんや危き足の快く運ぶは猛士胸襟に溢るゝ悅喜の餘勢ならん、偖て各室一名乃至二名の看護婦ありてすべての働を引受け居らるゝ我等戶を叩きて靜に入れば傍に置るゝ小さき臺に向つて病床日誌を記しつゝある看護婦諸姉はやさしき咲をたゝへて迎へられぬ、かく迎へられつ送られつして行きし內或一室にて一看護婦の電氣治療に忙はしきをも見受けたり。

さて之丈にては未だ看護婦諸姉の勞苦の百分一をも知るを得ざれば何とぞ今一層其働るゝ樣を見て後進の女生諸子の奬勵にもしたき者と思ひ其筋の方々へ志の程を申し入しに懇切なる方々の事とて直に爲に斡旋の勞を給ひ去る土曜日を以て普

通の人の面會を許されざる午前に慰問する事を許されたり、此日は取別近頃になき寒氣の烈しかりし日なりしが兼て九時より診察治療ある由を聞し事とて遲れぬ樣にと早くより第一分院さして赴きぬ滿郊霜に氷りて蹄趾白く謟る〻處踏めば音あり朔風斜に帽を拂へば皮膚爲に嚙る〻か如し靜に目を擧げて北關を望めば人馬絡繹として大本營に往來し野廣き所には新兵砲車を挽いて走り石壁高き處には樹下に新喇卒の調韻を學ぶあり彼輩も亦何れの日にか滿淸の野に勞すべき者なるを思へば廣陵の寒何すれぞ堪へ難からんや。頓て病院に達し名刺を出して看護婦總取締高山夫人に面會を求めしに兼て仝夫人より通じありしと見え直に入門を許されて其詰處をさへ數へらる、門を入りて右折し又左折して廣庭に出すれば幾多の病室左右に整然列を正して變へ縱横に走る廊ありて之を連接す此廣庭に入りて忽ち目に入りしは白衣の婦人が桶を提け右往左往して如何にもいそがはしげにて數個處の井戸には車の音にぎはしゝ聞けば每土曜日は各室の大掃除日にして午後には醫官の精密なる撿閲ありとかや然れば病者を看護しつゝ此事業をも爲さゝるを得ざる也、やがて指教せられたる室に至りて見れば唯見る三四の婦人が寒風に亂鬢を拂はせ豐頰は紅に染め桃紫を帶べる手腕を高らかにかゝげ出し長くして濶き廊下病室を拭ふて餘念なし之を妨ぐるは罪の甚しき者とは思へどもさりとて止むべきにあられば其一人を妨げて高山夫人のある處を尋ねやがて看護婦取締詰處なる掛札を見止め得たり折から夫人は公用のため合宿處に歸られたる後なりしを以て暫く待ち居たり、見れは其室は六疊敷位にして元より天井なく壁は削らざる板を張りたるものなり室内備へらる〻物は一脚の臺と椅子及び寢具と他に大火鉢ありまた其隣室二間は看護婦諸姉の宿直せらる〻所にして構造器具等病室と異る所なしとか今其狀を見るに元より永久の用の爲に建築せられたる宏壯の病院には比ぶべくはあらざるも其利便にして萬事の能く整ひ居るを見ては軍國多事の際誠に當局者の方々の配慮の如何に充全なるかを感服する外あらざる也、さて斯くいそがしき中なるにもかゝはらす一婦人入り來りて余の爲に靜に茶を煎らる勿躰なし此繁忙の日に來りて此臨時の勞苦を增させたるかと深く心に謝しつゝ喫すれば其味甘露の如し嗟看護の間に洒掃あり日夜東奔西走する内猶は客を待つの法具はる監督者の用意も亦た如何に普きぞ。待つ事暫くにして夫人來らる僅に外套を脫りて直に案內せらるれば多忙なる監督者を妨ぐる事の如何に罪深きを心に詫びつゝ從ひ行きぬ、此日慰問せしは都合六室なりしが多くは平病者にして只二室の方々のみ負傷者なりき殊に在院患者は各地に轉送されし方多く一方には戰地結氷の爲め歸朝患者の絕へし等により其數少く且つ何つれも既に稍時日を隔たる事とて病氣も大に恢復し遠からず出院する方多き有樣のよしなりし、さりとて各室猶多數の患者ある事とて仲々尋常の繁忙にてはあらざる也殊に掃除日の事とて各室皆看護婦諸姉が數十の寢臺の下を潛り今や大事と洒掃し居らる〻を見たり。さて此日參觀せし治療につきて記さんに其室の醫官は赤十字社醫員の醫長にて三名の看護婦傍に侍りぬ、第一に治療を受けたるは右足親指の根元を打拔れし兵士にて杖によりて辛くも治療處に出で來りぬ看護婦諸姉は靜に其手を取りて柔に腰掛に掛らしめ醫官の指圖に從ひて一姉跪いて繃帶を取り除けば他の婦人側より之を助け一婦人は器械を持て醫官の命を待てり繃帶取り去らる〻や醫官はがーぜを取り除き靜に傷處を洗ひ淨め其現況を察して藥を施さる諸姉即ち傍より藥を捧げがーぜを献く醫官要處の處置を終るや諸姉再び繃帶を捲付たり。次に來りし者は下腮の右邊を傷けし者にて齒を傷ひ居たり醫官靜に診察をなせば一婦人既に一碗の白湯と漱器を持ちて侍せり、やがて其治療終るや余は他室に赴く時に高山夫人顧て曰く「彼の白湯と漱器とを持ちし看護婦が木澤夫人なり」と、回顧すれば木澤一等軍醫が撰拔せられて第一軍附となりて渡韓せらる〻や不幸にも未だ目的の地に達せざる內に病にかゝり途上に怨を呑んで沒せらる當時朝野擧つて之を惜みたり今や僅に一二ヶ月にして其夫人を院內繁忙の裡に見んとは斷腸の悲哀は何時何處に捨られけんよくも此大決心大覺悟を成し給ひたる後にのこされし家族の愛着前途に橫はる幾多の困難もすべて亡夫の精神を嗣ぐと云ふ無上の覺悟を打忘れて志かく來りて以て柔和謙遜に身命を献けて一兵士の爲にも漱器を取りて看護せらるとは實に感ずべきの極美にあらずや日本女兒の魂こそ實にかくこそありたけれ余が實に親愛する日夜其後年を憂慮する數見違にも此魂をこそ持せたけれと斷願をこめつゝ其室を去りたり、やがて慰問を終り高山夫人にも謝辭して出で見れば井戸の音は愈よにぎやかに立ならぶ便所の內にも洒掃の音高し彼處此處に白衣の婦人が屋外に箒を用ゐらる〻は雨だれの塵を拂ひ小溝の芥を取り除る〻なり、かくて其勤勉を賞しつゝ其の愉快に滿足して實意に立ち働かゝるを感じつゝ門を出てゝ歸りぬ。

休息の場所

看護婦諸姉が三十時間の長き勞働を終へて歸り僅に制服を脱して餘力を養はるゝ處は實に合宿所の一室中なり、今日合宿所は二ヶ所に在りて一は博愛病院にあり今其概略を記さんに病院の藥局は事務處として用ゐられ其病室こそ諸姉が起居せらるゝ處にして現に此處に宿せらるゝ者百十人ありと、高山盈子夫人總取締として之を監督せられ其下に副取締あり總組長あり以て其各部局を治めらる、室は元來病室の事なれは元より廣からず僅に六疊にて之に床あり押入ありと雖然して各室六人の割合のよしなれば其手狹なる事想像も及ばざる程にて只其規定せられたる人數の半が病院に交はる宿直せらるゝを以て實際は三人宛の樣になる故にて辛抱も出來るとの事なり、然れど食堂あり浴室あり以てすべてを便し得らる然れども元よりかゝる大數の人を收容せらるべき塲處にあらねば何事も手狹不便にて高山夫人を訪れし時の如き事務處に用ゐらるゝ藥局の片隅にて面語せし位なり。第二は此處を去る一町許の普通の住家にて京都府より出張せられたる四十人の看護婦合宿せられ新島八重子夫人之が取締を引受け居らる、此處も亦手狹の家にて八疊數四間に四十人なれば仲々究屈にして只其半數が宿直せらるゝの故にて濟みゆく位の由にて新島夫人に面會せし時の如きは疊三片を敷く玄關に衣服其他の置きあるを片よせ毛布半をしきて殆んど膝を接して語りし如き有樣なり。諸姉は此究屈なる一室を以て唯一の安樂鄕とし三十餘時間の勞苦心痛を此に僅に數時間の睡眠に醫さんとす其苦勞の程仲々に庭園は廣く家屋は宏壯にして數千の金を投して只其人々の便利の爲め充分に充分を重ねて建築され暑ければ窓を開いて遠く數里外の海風を入るべく寒ければ暖むるに舶來の暖爐に石炭の熾に燃ゆるあり龍頭一捻すれば湯水其欲する所に從ひて奔騰し來る洋音和樂耳に絶えず親切なる朋友慈愛ある教師何事として全備せざる事なき學窓の下に勉學する幸福なる女學生諸子の仲々想像にも及ばざる所也」然れど一方に於て之をクリミア戰爭の當時ナイチンゲール孃が遭遇せし勞苦に比し來れば實に霄壤の差ありて偏ら當局者の親切注意の大且つ全きを謝せざるべからざる也。

觀察せし所

さて之等の事實は余が自ら得たる者のみにて看護婦諸姉の勤勞の全体より見る時は實に九牛の一毛に過ぎずして直に之に因りて判斷すべきにあらざれば他に其筋の方々より聞及びし事友達の實見せられし事等よりして觀察せし要點を演べて聊か大方の參考に供せんとす然れ共元々かゝる事には全く盲目にして萬事に拙き者のなす事なれば其不當なる點も元より多かるべく此に豫め看護婦諸姉と大方諸彥に謝し置くを要す。

偖世には隨分冷淡に判斷する人もありて曰く『さきに「ナイチンゲール」孃が安寧幸福の生涯を捨てゝ遠く東歐蠻烟瘴雨の戰地に至り全く準備なき地に唯一に精神のみ以て未曾有の大事業を興せし時は必ずや仝志の內にも其術に委しからざりし人も多かりしならん經費支辨の如きは全く知人の親切孃の淚によりて僅に軍資の內より惠與せられし者ならん從つて其事業は只滿腔一片の仁愛心によりてのみよく成就したる者なるを以て世界擧つて其德を頌したるも今日の此事業の全般を察するに赤十字社なる一大社は組織せられ總ての補助は物として具はらざるはなく先づ三年餘の貸費教育の道を設け其非常の際職につく時は衣食住の三者は盡く充分に支辨し十金內外の報酬を與へ若其職に倒るゝ者ある時は三百五十圓の一時賜金を授くる等其待遇の道實に全備せりと云ふべし殊に勉學の當初今日の如き非常の塲合には如何なる都合あるも必ず出院して勤むべき契約ある事なれば報恩の點よりするも責任の點よりするも是非勤勞すべきはづにして必しも譽むべき者にあらず之に加ふるに戰地に出張するが如きものは當局者の精神にもあらざるが如くなれば硝烟彈雨の下に傷者の熱血に衣の袖の赤に染むなどの如き事は先づ無き方なるべく異鄕の病院に異なる氣候に困しみ不完全なる病舍中にて看護する等の事もあらず己が國內にて用意周到なる病院の裡に其職をとる事なり故に假令ナイチンゲールの誠心なき人と雖どもよく其事業を爲し遂げ得られざるにあらず然らば直ちに之を呼んで大德行なりとし忽ち其人を呼んで東亞のナイチンゲールとするが如きは頗る輕擧なりと云つべし若し夫れ之をしもかく賞讚すべくんば彼の敵彈雨注する劇戰塲裡に傷者を收容救護する衛生隊の如きは如何にすべきか』と謂に此の評語は一々事實に基く者なれば之を以て失當と云ふ能はざるも冷なる事氷の如く無情なる事木石の如しとは云ふを得るなるべし、畢竟かく何人も此の事業に從事し得る樣に至りしは全く社會の道德が此の事業に與へし恩惠にして決して其の事業の性質が變更せしにはあらざるなり、ナイチンゲールの時に大德行なりし如く今日に於ても能く其の精神を以て遂行せば等しく大德行たるや疑ひな

し、さて看護婦たらんとする人の必要なる準備性質覺悟は左の諸條件なるべし。

○準備即ち看護學及び看護術の修練、元來此職貟傷及疾病に關係する事なれば貟傷疾病等の性質其變化及び學理上の處置等を知り居る事は元より明白なる事實なり且つ看護術の如きも眞實に適良なる熟練を得んとすれば是非共醫師の教導の下に實際につき修練せざるべからず之れ元より明白の事實なれ共往々只精神のみ忠實なれば容易に成就し得る樣心得る者あり此度にても未た學術共に經驗なき人にして只奉公心より看護婦を志願せし者あるよし、これは寧ろ當局者に迷惑と繁雜とを與ふるのみにして却て初志に反するに至るべし畢竟は看護と云ふ事が之迄輕んぜられし餘弊なるべきも人の生死に大關係ある事業の事なれば充分に準備せる處なかるべからず、赤十字社理事首長淸水俊君曰く「凡そ充全なる看護婦たらんとする者は學と術と共に少くとも二ヶ年以上修練せざるべからず」と之れ底き觀察と長き經驗より歸納せられし意見なるべし。

○必要なる性質即ち精神上の準備、高山夫人歎じて曰く「妾が實際此臨戰地境に來り多くの傷病者に接し之が看護を自らにし又幾多の忠良なる婦人が實行せらるる處よりして曉りし事は今日迄此事業を見し事の寧ろ餘りに輕ろくして其眞價のある處其素養を要する點の仲々に高かりし一事なり、平時普通の病院にて看護に從事したるのみにては仲々に戰時の傷病者の看護の實際は想像も出來ざる也平時の看護は重に其術の熟練によりて大概は成遂けられん然れど戰時の看護者たらんとする者は實に高尙なる品性確き覺悟なかるべからず、此事業は實に高尙なる心を以て下賤の業を取るにあり、豈夫れ容易ならんや」と實に左もあるべし、かくてこそ實に天下を聳動する名譽も得らるゝなれ。又曰く「從つて向後此事業に從事せんとする者は其手腕の熟練よりも之を支配する自己の品性と千艱萬難に屈せず撓まざる覺期の在るや否やの二ッを先づ顧みざる可らず」と高尙なる品性及び確なる覺期之れ實に精神的準備の綜合文字として最も明確なる言辭なるべし。

一、親切にして公平なるべし、高山夫人曰く「奉公の義心と忠心より出る親切との二ッは看護婦に必要なる二要件なり」と之なくんば遂に此職によりて成功する事難かるべし、實に親切ならずんば數十の患者に對して日夜やさしき言葉哄める容貌にて接する能はざるべく衷心より患者を思ふ人ならでは到底兩便の掃除より三度の食を哺ますする等の雜事細事は出來ざるべし聊かの汚れ聊かの變象聊かの感情等眞實裏表なき親切の人ならずんば到底注意し得ざるべし眞に親切てふ一性質こそ患者を慰め患者を滿足せしめ患者を救ふに唯一の必要なる條件なるべし。然れ共性急にして疑ひ易きは病者の常なり然して今日の傷病者は盡く年壯なる男子なり之に接する女子の處行にして假りにも一點の偏する處あらんか猜疑百出し其結果謀り知るべからず故に眞聖無瑕なる愛を以て公平に一般に親切なるべし、公平親切之れ看護婦に要せらるゝ性質の第一なり。

二、綿密鄭重にして然も敏捷活潑なるべし、一指の汚れたるも傳染の媒介となり一尺の布片の消毒不充分なるも傷の痛を增し一顰一笑盡く病者の精神に關係あり能く多數の人を看護して長日月を堪へんとせば先づ充分に綿密にして鄭重なる人ならざるべからず、然れ共又多數の人に接し多量の仕事を行ふ事なれば仲々遲緩の人にては容易に其業の半をも成し遂げ得べきにあらず、故に鄭重に綿密なると仝事に敏捷活潑に行はざるべからず」と之亦高山夫人の語なり、願に何事として世に此兩性を要せざる事業はあらざるべし然れど看護の如きは貴重なる人命に大關係ある事業にして俚諺にも一に看病二に藥と云位なるを思へば看護婦としては取別此兩性を具へ居るを要す、殊に綿密周到なる事は看護者に最も必要なる性質にして看護者として男子が女子に劣る所は此一性質の充分と不充分とによりて分るゝ也、草刈軍醫長曰く「今回初めて看護婦を貟傷者の看護に採用して確めたる事實の中彼等が天性綿密にして充全の注意を要する大患者を看護せしむるに適する事は爭ふ可からざる確なる事實なり」と夫れ已に男子の及はざる所にして女子能く之を遂行せしは重に此天性の補助なりとせば綿密鄭重なる事は看護婦品性に於て最も重すべきの一なるや疑なし。

三、勤勉堅忍の人ならざる可らず、元來看病なる業は日夜一時も休息すべき時あるものにあらず病者は一時も捨て置く可き者にあらざれば重病者を看護するには只一人なる時と雖ども最も多くの勤勉勞苦を要する也、聞く今日の規定は四十人の傷病者に六人の看護者ある割合にて然も其半數は隔日に斷宿すべき都合なるが故に實に一人にて十一二人を看護する割合なり又其勤務の時間は前日の午前八時より翌日の午後迄にて殆んど三十時間にわたり又夜中は一人は全く寢らず二人は交々は眠りかくて二人丈け何時も起き居る都合なりと、然して彼病者が最も寂寥

た感ずるは深夜人靜まりし後にして彼か望郷の情に堪へず苦吟轉々するは寒月高く懸りて竹影窓に映ずるの頃なるなり徹宵遂に靜座安息する時なしと且又看護者中一名の病に懸る者あらんか代りを務むる人を要す此際は一度歸宿せし者も忽ち呼出され三四晝夜遂に一睡の時なくして勞苦する事もありと聞く、猶ほ又之に加ふるに看護以外の用務たる病室便所の掃除衣食の洗濯殊に土曜日の大掃除等あり、故に若し眞實勤勉の人にして其習慣ある人にあらざれば遂に終を全ふする能はざるべし。謝すべき哉百五十の感ずへき諸姉は實に能く之を成し遂げて未だ一回も爲に責罰を蒙りし人なしと、清水理事首長感賞して曰く「思ひ見よ彼等の內には八月の初に來りし者あり彼等其職に在る事殆んど半年に及ぶ此間孜々勉勵して一日の如し之れ仲々金錢名譽の爲に働く者の能く爲し得る處にあらず畢竟奉公の義心熾なるより此に至る者なり豈感ずべきにあらずや」と高山夫人新島夫人等皆看護婦諸姉の勤勉堅忍を賞して措かず。國家の爲め賀すべきの一事たる也。

〇覺期即ち就職の根本的準備、學と術との熟達あり高尙優美の品性ある人と雖ども愈よ將に業に就んとするの時に沈思して決定すべき覺期あり、即ち

一、嗜欲の制御即ち堅操の覺期、初めて傷病者の看護に看護婦を用ひんとの議を聞くや第一に諸人の心頭に浮びし最悲むべき憂慮は實に意氣激昂せる青年男兒の看護に等しく正に妙齡の處女を用ゐん事は或は遂に此名譽ある事業を汚損する不測の恨事起らんかの一事なりし、若し夫れ其災害の及ぶ所を記さんか實に悖德者のみに止まらず引て國家の名譽を毀損し斯業をして萬世遂に恢復の目途なき悲運に陷らしむるに至るべし、故に苟も看護婦となつて國家軍事の機關の裡に働かんとせば必ず先づ退きて靜に己か心に問ひ確に健全有力なる道德力あり以て如何なる誘惑にも勝ち得る事を認め毅然として動かず變ぜざる覺期を爲して然る後に立ざるべからず。高山夫人襟を正して曰く「此一事に附ては未だ東都を發せざる日に於て大に覺期する所ありたり、出發の命令は實に昨年七月の末に受く、妾は十人の看護婦を率ゐて此地に來る事となりぬ、妾は當時此一事を憂へておく能はず遂に部下の諸孃を呼んで告げたり「妾は不肖の身を以て今や諸子を率ゐて將に戰地に赴かんとす妾此に出發に先だちて一事の諸子の覺期を聞かざるべからざる者あり、諸子の能く知れるが如く抑も我邦の赤十字社は實に萬國の仝社に仝盟す故に若し我邦の赤十字社にして失態あらんか眞に之れ國辱たる也、今や諸子と共に特に撰ばれて赤十字社看護婦たるの名譽を負ふて出發せんとす、夫れ名譽のある所は又責任のある所也妾等の双肩には帝國の名譽ある如く又能く之を發輝するの責任もある也、諸子乞ふ思へ諸子にして若し不品行等の失態あらんか其影響の及ぶ所爲に帝國の名譽を毀損し赤十字社事業の發達を妨ぐるに至るべし、若し夫れ萬に一つもかゝる事あらんか妾は上は聖明の　陛下に對し下は親愛の仝胞に對し何の顏あつてか生存するを得ん妾唯一死以て謝するあるのみ妾已に死を決す妾にして果して此事あらんか諸子も亦た必ず晏然獨り生を貪られざるべし、諸子果して決死以て婦德を全うする覺期ありや」と諸孃實に又其覺期ある事を告ぐ、妾即ち喜んで率ゐて東都を發す時實に八月三日なりき、爾來此地に來り責任愈よ重く到底妾の如き者の爲し遂げ得べきにあらず其數の如きも始めは只十人なりしが今は增して遂に百十人の監督者たるに至る此に於て妾の覺期は愈よ確し、顧ふに妾遂に生て再び邦國を見ざるべし」と宜なる哉百五十の看護婦中未だ嘗て一人の忌むべき處行ありしを聞かず之は實に各自の志操の確固なると此硬骨忠實なる老夫人の監督奬勵の宜きとによるなるべし、軍醫長も亦稱して曰く「看護婦採用の當時最憂慮せしは此一事なりしか今日に於て之を見るに皆仲々に志操の堅固にして曩日の憂慮は實に杞憂に過ざりき、之れ各自の忠義心の然らしむる處にして實に國家の慶事なり」と余は今日の看護婦諸姉が此最要件に於て然かく堅固なるを祝すると共に遂に能く其終を全して無上の好例を後進者に貽されん事を冀望す。

二、奉公の義心即ち獻身の覺期、今日在院せる患者は皆國の爲に傷きたるにあらざれば異鄕の風土によりて病を得し人々なり從つて其意氣頗る軒昂戰場の餘勇猶熾なるに加ふるに病勢の然らしむる所か感情實に銳敏にして之か看護に從事する者細心して能く之を慰め之を勞はるも猶ほ時に其意に觸れて叱咤嘲笑罵詈至らざるなく病者の誤解朋友の誤解仝じく重れ至り之に加ふるに服從を以て其精神としたる規律は之迄自由勝の教育を受けたる人々にて仲々に堪へ難きか如し、かゝる境遇に立ち艱難に堪へ病者に對しては表裏の取扱なく上官に對しては其從順にして然も能く長日月を堪へんと欲せば仲々に一時感情によりて奮起したる者や名利の爲に働かんとする者の到底堪へ得へき事にあらず、誠に誠に衷心に明皎々たる奉公の大義心ありて初て能く之を成し遂ぐるを得る也、若し此根本的覺期なくんば其働は徒ら事となるにあらずんば其人は忽ち倒れ終るべしとは少しく看護婦諸姉の働

を観察せし人々が直に見出す事實也、余は一語の説明を加へざる可からざるは所謂奉公の最終極は能く忠實に其業を爲す底の事に非ずして實に其職の爲に倒るゝてふ決死献身の覺期を以て死しても其職を全ふするにある事なり、こは只感情的に絶叫する語にあらずして實に避く可らざる事實也。聞く之迄看護婦にして患者の病に感染せし者殆んど十一二名にして今日猶ほ病床にある者六名ありと又元大阪にして京都市より出張せられし此看護婦柴田某は急性腸加答兒にて倒れたりと之れ職に倒れし第一先鋒者たり又聞く他の京都市より來りし一看護婦平山某は腸窒扶斯を感染して數日前遂に死亡せられし由、其病に感染するは元より多少不注意不綿密なりし故なりとするも一人にして日々劇性の傳染病患者十餘名に接する事なれば其遂に一點の不注意なくして能く感染を免るゝが如きは殆ど天惠と云ふて可なるべし、實狀已に斯の如し然らば決死献身の大覺期は實に當初に爲すべき最要件なりと信ず。此大覺期を要すればこそ此職がすべての職にまさりて榮ある大德行たるなれ。我邦の國粹にして婦女子と雖とも義の爲に倒ると云ふ氣象に富む證として朋友仝業者が傍に倒るゝを見つゝ愈よ勇み勵みて其職を勉めらるゝ百五十餘の婦人あるは實に心强き限にして後進女性奮興するに足ると云ふべし。斯の如く學と術とに熟達し高尚優美なる品性にして堅操献身の大覺期ありて始めて完全の看護婦たるを得るなるべく、完全の看護婦にして始めて完全の看病を成し遂ぐるを得、完全の看護豈に容易なる業ならんや。ナイチンゲール果して何者ぞ實に此技術品性覺期を備へし看護婦ならずや、然らば完全看護婦はナイチンゲール也、完全の看護は到底ナイチンゲールにあらずんは遂行し能はざるべし。終りに於て左の一雜報（藝備日々新聞第二六二〇號）を摘録して今日の看護婦諸姉が東亞のナイチンゲールてふ名に耻ぢられざるを證せんと欲す。

○荒武者の涙　私は日清戰爭の抑もと云ふ頭より渡韓して成歡牙山平壤等の戰爭に臨んだものでありますが不幸にも仝平壤の戰で敵彈のために左肩を打ち拔かれ口惜しながら歸朝して當廣島陸軍豫備病院第一分院へ入院して治療を受け居るものであります、さて玆に私の感喜措く能はずと申すは同分院第七號室なる看護婦太田、山田、柴岡の三名の事であります私は此三名が如何なる點が親切だと云ふ事は申上げません併しながら仝婦人等は他の或る看護婦の如く唯に表面のみの親切でなく心からして即ち仝意滿身皆親切だと申上げ置けば足れりと思ひますクリミア戰爭の時ナイチンゲール孃が鬼をも挫かん荒武者を泣かしめたと云ふ事を聞きましたが此等の三名の實に親切なのにはまた如何なる荒武者も一掬の嬉し涙を灑くであらうと思ひますヨシ此等の三看護婦迚もナイチンゲール孃に比する事の出來ぬとしても其心はナイチンゲール孃を學ばんと慕ひ居るものゝ外ありませぬ過賞かは知らぬが嬉しさの餘り病中筆を採つて貴社に投じた次第であります（一兵卒投）

嗚呼絕東の日本一度仁義の爲に立つや外には勇猛義俠の男兒仁義の爲に倒るゝあり內には堅操義俠の女兒仁義の爲に身命を献ぐるあり、國家の命脈は實に之によりて愈よ强固なるを得べし。人誰れか文明的烈女は歐西の特有物と云ふか、堅操義俠柔剛兼備は我邦女性の特質なり、若し夫れ之に加るに進步したる學術を以てせんか我邦女性は盡くナインゲール、ザックスの徒とならん。之を思ひても適良なる女子教育の愈よ必要なるを感ぜずんば能はざる也。

附　看護學を學科中に加る事

看護學の教授は此度取調べし他の條件なりき。今直接に病院或は看護婦に關係ある方々の意見を聞くに盡く看護學の必要を說き其普及を望み給はざるは無きが如し。然して之を教授する方法も自ら二途あるが如し、即ち一、完全なる看護婦養成の爲め看護婦學校を設立するか或は看護學科なる一部門を設けて二三年間學を教へ術を授くる者と二、看護術の一課を今日の學校に加へて極めて簡畧に最も必要なる事項をのみ授くるとの二法なり。然して諸君の望まるゝ所は大仕掛なる第一の方に非ずして寧ろ卑近にして實用に適する事を教ゆる第二の方なるが如し。左に清水理事首長の談話の要領を記して以て敢て大方諸彥の參考に供せんとす。抑も完全なる看護婦學校を設けんとすれば必ず學科と實際の取扱と相伴はざるべからず、今日東京に建て居る看護婦學校は在學年數を三年中とし病院を利用して教授せり、願に二ケ年以下にては到底完全なる看護婦を養成する能はざるべし、兎に角之は大事業なれば充分に研究せざるべからず、願に簡易卑近にして然かも最も必要なる事のみを教ゆる爲に今日の女子教育諸學校にて少しつゝ重に實際より教ゆるこそ却てよろしからんと思ふ。今參考の爲によき實際談を語らん、昨年京都船井郡の赤十字社支部の總集會を園部に開きし時余（理事首長）は社長に隨ひ共に臨席したり、當時餘興として園部及其近傍の三小學校の生徒對抗演習を

行ひたり、男生徒はすべて兵士となり敵味方二軍に分れ川を隔てゝ戰ひしが兼て一般方畧の定めありしと見へ一方敗走して其日の勝敗全く定りたり、やがて双方の衛生隊を務むる兩軍の小兵士等は續々擔架を荷ひて傷病者を戰場より運び去れり即ち之に從ひ行けば兼て病院と定められたる一教室に至る、忽ち見る夥多の女生徒は皆看護婦となりて繃帶を捲き消毒を爲す等に頗るいそがはしく其狀宛然實戰の如し、即ち小女子につきて負傷者の傷病者の容躰等を問ひ見るに彼等の中には十一二才の小女ありしも皆聲に應じて即答し然かも一もあやまる所なし然して繃帶の捲き方等を實撿するに一々法に應ひ且つ大に熟練せるを見る、余は之を見て實に感服悦喜措く能はざりき、即ち其地の會員につき如何にして此面倒なる事業をかく幼き兒童にかくまで滿足に敎へ得しかを問れしに其答によれば全郡近傍は兼て義勇奉公の念熾なる所なるが如何にぞして小學生徒の奉公心を奮興せんと欲し種々企畫せし末遂に女生徒には看護法を敎授する事に一決し幸ひ全處出身の人にして看護長となり居りし者の歸鄕せし者あるに囑托して日々放課後に三十分乃至一時間宛實地に敎授せしめたり然して之を始めしより當時まで僅に五六ヶ月にして仲々充分と云ふ所に達したるに非ざる由、余は當時適當なる教育法による時はかくまで敎育は實効なる者かと深く敎育と敎育法の眞價を感じたり、余は實に此位の目的にてかゝる方法によりて敎授する時は容易に此必要なる事業を敎育し得其結果は被敎育者の幸福なるは云迄もなき事にて又實に國家の元氣を振ひ起す一助ともなるべし、元より學科に於ても實際の技術に於てもかゝる簡略の事にては立派なる看護婦となられ得たりと云ふ可らざるも猶之によりて自家家族の災害を救護し得る者とは確に成り得らるべし、且又假令其方面に於ては全く價値なしと假定するも間接に得る處の盡忠報國の精神丈にても實に無限の價値ある大敎育を爲したる者と信んず、聞く其後北白川師團長宮殿下此地方を巡回遊ばされしせつ又之を見て非常に御感賞遊ばされし由。之れは只一地方の實驗談なるが余は實に全國の諸學校が之に倣はん事を冀望して止まず故に世の敎育者たる人に遇ふ時は未だ嘗て之を談ぜざる事あらざる也。貴校(女學校)の如き女子の學校に看護學を加ふる事は頗る必要の事にして深く賛成す、歐米に於ては中等以上の女子にして看護の一端をも知らざる者は殆んどあらざる也、不幸にして我邦に於ては今日まで看護の術及び看護婦を見る事頗る卑くして寧ろ之を賤みて顧みざりし位なりき、然れ共今回の事件により其迷誤も醒めしなるべく從つて向後は一層其必要を強く感ずる事ならん、思ひ見よ此際にしても若し聊か看護の道も心得居れば採用せられたしと願へば篤志婦人として間然する所なからん、然れど又國家有事の日の爲にのみ此業を學ぶとするは或は稍や過まれりと云ふて可ならんか此事業は實に母たる者妻たる女兒たる者に常に有用なる事なり、猶之を知り居る事が婦人のよきたしなみたる事の一例を擧んに數年前野州に大演習の擧あるや一郡吏あり或地より戰場に赴かんとして驅て或停車場に至りしに車夫過りて其車を顚覆して郡吏は其頭を傷く其場に在りし人々は皆周章狼狽爲す事を知らざりしが一貴婦人あり列車の窓より遙に之を見靜に出で來りて白き手巾を裂きて丁寧に其傷を包み與へければ郡吏は無事に戰地に至り其使命を果す事を得たりと、當時之を見し人皆其婦人のたしなみの深きを感ぜぬは無かりしとぞ然して其婦人は何んぞ計らん身は大諸侯の奥方なる鍋島侯爵夫人なりしと、侯爵夫人は兼て篤志看護婦會の會員にして當時演習地に出張せらるゝ途なりしとぞ、之れ只非常の場合に看護術が大効ありし一例に過ぎざれ共兎に角文明國婦人の美はしきたしなみには非ざるか」と之れ理事首長の高見なり、之を味ひ來れば斯業の要其効及之を學校に入るる程度方法年數精神等盡く具はりて其内に在り。新島夫人も亦特に余に告て曰く「他日人の妻母たらんとする女學生諸子は何卒看護の片端なりと心得居られたし、嘗て京都市の篤志看護婦會に於て月一回宛學習せし事ありしに暫くして會員方の話を聞くに皆家族の救護に大効ありしを感謝し居られたり然れば一周間何度として一年以上も修められなば可也に役に立つ丈を學ばるべし、然して其効は實に一家の幸福兒孫の健全を來すべし。願くは全國の女學校が進んで斯學を科程中に入れられん事を」と願ふに之迄女學校が此學と術とを等閑に附せしは寧ろ不注意の罪にして今日こそ之を改むるの時期なるべし。完全の看護婦學校を興し得ば頗る可なり。簡易の看護術が全國至る處の諸學校に置るれば愈よ可なり。若し夫れ此二者にして能はずとせば願くは各地の女學校のみに於てなりとも看護術の加へられん事實に切望に堪へざる也。

明治二十八年一月三十日廣島に於て記す

○安房の某へ答

……たとひ親が結びし約束にて彼人は素と知らざりしとも、既に知りたるのちの今は、彼人の約束となりしものゆゑ、君が彼人に對するの今は、約束あるの人として遇せざるべからず。之を知らぬときの君が申出は、固より當然にて、先づ口を開くべき男子の赤情にて候ひつらんが、彼人すでに約束ありと知りし今は、君が爲すべき義の務めは明白なり。たとひ、彼人は未曾て約束の人を見ず、亦た曾て戀思を開きしとあらずとも、神聖なる盟約はすでは其が上にかゝれり。たとひ今日はじめて君に對して赤情ありとも、君はもはや義として之を受くべきものにあらじ。君に對する赤情の故によりて、もし先約を破るとあらんには、之れ君は其の眞の愛人をして不義ならしめ、亦た不孝ならしむるもの也、これ愛人を愛するの道にあらじ。人生悲慘の衝突、この所ろにあり。人情義理のしがらみ、この所ろにあり。かつて稗史野乘に幾度か玩讀せし絶躰絶命の苦、現實に此の塲合に現われたり。切りに同情の念禁じがたしと雖ども、此の外に道はある可らずと固く信じ候。君は、熱愛あるの故に其言葉を冷やかにし、斷然として速やかに前言を取消し、忍びがたきを忍び、思ひ切りがたきを思ひ切り、飜然として無き昔しに反り玉ふべし。彼人をして些さかも後に待つ所ろなからしめ、此上、自由の義心を以て自由に處置せしめ玉ふべし。前途當然の成り行きは、只だ見えぬ不思議の力のみ見るなるべし。此際、斷ち切ると栽然たらず、半意半消の躰にて生ま中の取計らひあらば、是ぞ愛あるに似て眞の愛ならずと存ぜられ候。涙をのみ、血を滴たらす、眞衷の苦しみは、十分に十分に御察し申上げ候へども、之れ愛人を愛するの所以なりと悟られなば、幾分の御慰さめはあるべきか。いた〳〵しき心を忍びて、思はぬ事をも勸め參らせ候。皆なこれ人生の義理と申すものに候。

大奥の女中。日本の婦人。女子の本分
右三冊の批評甚はだ細微に入り、長文本號に掲げがたし。次號に於て同人の一覽に供えん。

隨感

○地に屬ける幸福

宗教家、やゝもすれば Earthly(地に屬ける俗界の事)の詞を用ふ。蓋し、天の事を榮えとして、地の事を卑しとするの意なり。夫れ、人は、洪大無邊の靈なり、安くんぞ只だ地に屬するのみをせん、天に屬し、來世に屬し、亦た宇宙八荒に屬すべし。こゝをもて、其の卑近凡俗の事にのみ拘泥執着して、高く解脱發達するの聖動を欠くに至れば、則はち、疾病あり貧苦あり、別離あり、死ありて、無常流轉の世相を觀ぜしめ、以て、物の哀れを識覺せしむ。これ、天の敎育なり。蓋し、大聖の進歩を爲さしめんが爲めに、殊更ら目前の患苦を與へ、以て下根の地に永く泥着せしめざらんとするは、天の慈愛に出づると雖ども、抑そも、天や豈に徒らに人を苦しめて之が永く、地の事に貧しからんことを求めんや。かの所云るEarthlyの事にも滿足なれ、身躰も壯健なれ、富も饒かなれ、家庭の樂しみも圓滿なれ、愛者は長く別離あらざれとは、抑そも天の父たり、人の親たる上帝の大御心に於て切りに願がひ玉はざる所ならんや。われ、伏して、御心を惟んみるに、天父は此等あらゆる無くてならぬものを施こして、其子を滿足せしめ、圓滿具足の幸福をもて一生を悅喜せしめんとは、慈愛限りなき御情けが、切りに望みとせらるゝ所ろならん。只だ但だ低きに執着して高きに登らざるの痴を憫れみて、時あつてか、特更らに天鞭を下し玉ふ。このとき、愚かなる赤兒は、只だ泣き叫びて惑ひ疑がひ、天道是か非かなど怨言することあらんには、大なる義愛に富ませ玉ふ御心に於ても、痛ましと歎かせ玉ふことの多かるべけれ。夫れ、クリストの敎は、神を天の父となし、吾等をして之に子の如く信じ、子の如く仕ふることを示すにあり。夫れ、父子の情は、親子にあらざれば、知るべからず。冷々乎として、神學を以て論じ、ドグマを以て律するの時、何くんぞ、油々たり澤々たる言ひ難きの趣味を見さんや。われは、天父が、あらゆる世間地根の幸福をも、われに惠まんとしつゝ、而も尙ほ未だ之をわれに施こしがたしとて、暫らく吾が貧苦し、究迫し、困倒するの慘狀を見そなわしつゝ忍び玉ふの大愛を悟覺し、坐ろに其の御情けの動く所ろに涙を落す。嗚呼、天父の攝理は、何如なる時、何如なる事にも麗わしき哉。

死者枕頭の歎

一杯の氣息盡きて、三寸の生命、立どころに失せ、紅顏忽まち蒼白に變じて、某と云へる一人物、すでに忽然として死去せり。

嗚呼無常迅速の姿、露滴、風に散りて、雲煙何れの處にか消え失せたる。百軆もとの如けれども、一縷の脈斷絕して、萬事すでに休んぬ。讎敵來れども、恐らず、愛人來れども笑わず。情交の火消えて、遣る瀨なき思ひ川の水流れを止め、美人も其のつゝしみを護らんよしなく、丈夫も其の恥ぢに耐ゆるの術なし。魂魄、遺愛の妻子を顧みるや否や、形骸久しからず土に化して木石と伍せんとす。人間の末路そも／＼何するが爲めぞ。空に飛ぶ雲は古人が名殘りの息氣か、野に咲ける赤細花は、誰が心丹の形見なるらん。學ぶ所ろ、知る所ろ、修練する所ろ、蓄積する所ろ、聖者、賢人、愚者、奸惡と共に、等しく同塵に歸せんか。天に叫べども、壽百才につゞかず、地に蓄はふれども、富、身後に甲斐なし。彼の青山は百代とこしえに青く、彼の洪流は万世かぎりなく流るれども、人や万象の靈をあつめて、而も忽焉として速かに亡す。農夫、地を耕やせば、朽骨、せめてもの慰さめとや、草を肥やしてあやしき、花さく。墳墓、時あつてか燐火を吐いて、餘焔を明滅に遺さんとするは、妄執のはれねばならむ。紙上の人の名は、万代に生くると言ふも、眼前の死者、語るに答えず、呼ぶに應ぜざるを如何にせん。愛子は、母に別れたり、妻は良人に後れたり、親子、伉儷、同胞、交友、相睦むと、幾日月、相伴なふと幾年月ぞ。死別以後、万々年、限りなく相別れて、再會の期なき乎。子よ、妻よ、母よ、父よ、良人よ、愛友よ。呼べども、答へず、叫べども、答へず、動かせども、答へず、起せども、尙ほ答へざるとき、嗚呼、死の運命、正に來つて、何處にか、伴なひゆきし刹那。前の愛人、今や全世界中に亡せたりと感ずるとき、人誰れか、無常の世相に哀れを催ふし、生命の賴みがたきに腸を搾りて、厭世憂悶の情に堪ゆるとを得ん。嗚呼、果敢なきは、人の世の樣なるか。遣る瀨なし、あぢきなし、思ひ切まりて何をもて慰さめん。一身、消えてゆき、心地、墳墓に入るが如し。嗚

呼、われを引出すものは誰ぞや。

夫れ、人世は何如のものぞ。孔丘盜跖は當年の應報をもて聖邪を別ちがたし。百世史上の批判、遂に何ほどの價値ぞ。身後の定則をもて、生前に律すること能はずば、生前の道德は、何によりてか定まる。賢愚は敎育により、敎育は事情による。聖人の一生は、何ものによりて造られ、惡者の一生は、何ものによりて縛られし。大道に定義なく、仁義に定形なし。万人の死の骨、一樣に枯るゝを見れば、生前の氣息、同色の靈煙に化せずや。誰か、道を律し、誰か、眞義を定むる。善人も、學者も、愚者も、奸物も、共に同躰の最後に入るとせば、天地の法則は、一視寬洪のものにあらずや。何等狹量の人か、圓を細かに割り、環を曲げて削り、もつて小見世界の束縛を固めんとするや。眼前の死者は、赤誠の人なりき、然れども、至信の効なきこと斯の如しとせば、虛僞の害なきことも、亦た之に同じからん。眞理到底、明らめがたし、人世必竟空々に歸すべし、人間の智慧、識とる所ろ遂に何程、寧ろ初めより疑を懷いて、疑に信を置くの優れるに及かじ。疑がふこそ、切めて確かなれ。

疑がふこそ、力なれ。懷疑、々々、人世の何ものをも疑がひて而して之に切めてもの安きを寄せん。

左れば、人は、何を苦しみて、小道に拘泥し、賴母しくもあらぬ人世に忠をつくして、眞面目ならぬ天地に眞面目の愼しみをか爲すべき。衞生とは、憶病ものゝ發明のみ、遂に死すべき肉骸に何の衞生ぞ。情を矯め、慾を制して、之を道となす、道なるもの、抑そも自然に背反するの謂ならんや。短かき生涯には、大いに樂しむべし、之を長くせんとして、能く百歲に及ぶもの多からんや。放埒とは、誰が付けし名稱ぞ。磊々落々として、自然に任かす、たとへば、大流を下り、强風に颺するが如し。名聞細譽に拘らふものにあらずして、何の爲めに此の名稱をか恐るゝ。今夕爛熳として咲かずば、明朝の風あるとき如何にせん。良夜には肴なくも宴すべし、戀には全心を開け放すべし、何を區々として身を縮めて謹直たる。眼前の死者、遂に躬から一身を保護すること能はず、末路到底斯の如くば、身躰の保護は、情の行くまゝに任すにある耳。

然れども、死者を見れば、警戒の念生ず。死や、忽然として

來る。死後の遺族あわれむべき哉。吾を吾とも思ひて、一家の杖柱となし、露命を之に托して、風波のあらきに、賴みの綱にすがる、忽まち之を斷ちて、浮萍のゆくがまゝに任せんは、情けなき業ならずや。吾の死するは、事の休する也、眠ると見て征かんも、遺れる人の落付こそ心掛りなれ。左れば、吾なき後の爲めには大ひに準備せざる可らず。たとひ黄金は、すべてを救ふヿ能はずとも、多くを救ふヿを得べし。貯畜に念なかりしは、吾を萬づ代迄と思ひしが爲めの誤まりなり。いざ、之より警戒して、懇ろに遺族が爲めに用意すべし。露命、明朝を必期すべからず、油斷忽まち暗黒を來たす、今や寸時も猶豫すべきにあらず。ことに、あらゆる交捗は、生前に始末を了えざる可らず、俄然、我先づゆきて、遺族が迷惑は幾くばくぞ。一と度び念ふて此に至れば、掛念、燃えて身の躍るヿを覺ゆ。

左れど、無常を念ふ其心も、疑を懷く其心も、放然として自然に任せまくする其心も、大いに警戒する其心も、遂には亦皆な失せゆくべきもの也。失せ行くとや、遂に死かる可らず。たとひ疑ふも、放埓するも、罵るも、悲しむも、雲は飛びて亦來り、水は流れて又涸く、天地悠々として、人世の相毫も變わるはなし。嗚呼、人世の相そも／＼何處にか眞相をてらす、天地そも／＼何處にか祕訣をもらす。若し能く悟徹して、其の根底に入るにあらずんば、生くるヿも生きざる也、死せざるも倘ほ死せる也。左らば、人は先づ眞ヿの悟りを開くヿを要す、一大安心の妙機未だ定まらずんば、それ何の處にか身を安置するヿを得ん。廣居も其居なきにひとし、日月も照らざるにひとし。光明は、心理より發し、安住は胸座の上に立つ。先づ、宗敎の安きを得ずんば、如何んかして何處にか生存せん。

嗚呼、同一の死者。眼光を射るにあらず、言語を發するにあらず、依然として沈靜し、默々として悽寂なり。彼、誰をながめ、誰に問はんや。然れども、枕頭の諸人、念ずる所ろ、各々異なり。夜深く、万籟聲たえて、彼等が鼓動脈々として響くのとき、彼等は皆な異樣の感慨を動かしつゝある也。

暫らくして、館に釘うつ音も聞ゆる也。明日は、歌うたひつつ穴を掘る人もあるべし。後には、遺産の分配に算盤を彈く

人もあるべし。左れど亦た、密かに香火をたむけ、墓石に水そゝぎて、終年之を潤ほす人もあり。一生、之を忘れず、胸に生かして、共に同もに棲まふの人もあり。人は、さま〳〵なり、人の心に至つては更にさま〳〵なり。

○信ずと云へる情の義

愛なきものは、神を識らず、神は愛なればなり。信なきものは、神を信ぜず、神は信ずべきものなればなり。夫れ、力あること限りなく、智慧あること限りなく、吾等を愛すること亦限りなき、最上至高の天帝にすぐれて、倘多く賴みとすべく、倘更に信任すべきもの、何處にかある。昔し、某の人の子は歎じて言へり、天下、親なきの國あらずんば、親を去つて何處にか走らんと。吾等もし賴みとすべきものを求めずして可ならば則はち止む。苟くも、賴むべきものを求めんとせば、最とも多く賴むべきもの、天帝に超えて何ものかある。左らば、人、何が故に之に信任(コンピデント)することをせざる。若し之に任かせて、其の至深なる監護を信ずるときは、喩えば、大舟に乘りたらんが如く、大磐石に立ちたらんが如く、猛者にまもらるゝが如く、戀人に侍べらるゝが如けん。當に則はち些との懼れ、些との疑がひ、些との掛念だになかるべき筈にあらずや。然るに、人、一度び艱難に遭遇して、偶たま不如意の境界に沒する時は、忽まちにして、天を恨み、人世則はち是か非かと歎ずるに至る。是れ豈に、信ずることの最とも薄弱なる所以にあらずや。凡そ、愛するものゝ鞭は、痛きを覺えず、其が打擲は、寧ろ情愛を增すことあらん。人事の痛苦に際會し、世上の慘劇に親炙して、而も倘ほ疑がはざるは、其の動元の愛なることを認たむるが故なり。左れば、天地の主の愛なることを知るものは、あらゆる現象變遷の皆な愛より出ることを識とり、以て、感謝し、以て喜樂することを得。之を平安と云ふ。此故に、平安は、愛なる神に信任し、其の行動の總べて愛より出ることを疑がわざるより來る。左れば、信ずることの淺きものは、屢ば疑がひ、疑がふものは、屢ば惑ひ、自から迷ふて以て自から暗黑に入る、苦痛此より簇生す。此を以て、凡そ人を信ずることの切なるものは、亦た神をも信ずること篤し。信ずることの篤きものは、身を許し、心を寄せて、疑がはざる也、故に惑ふことなし、故に心苦することなし。彼の、忽まちにして、人を

疑察し、忽ちにして、人に對する信任を消す如き輩儕は、神に對するに亦た同樣の薄信あり。所云る、信ずるとは、即はち、信任するの義歟。故に、亦言ん、既に見る所の兄弟を信ぜずして、如何で見ざる所ろの神に信を置んや。見る所の兄弟を愛せざる者が、見ざる所ろの神を愛せざるに等し。

爛熳

朝の空の小鳥のしらべ

隱花

父なるエホバは讃む可き哉
　天地は　とこしへに　大能を　たゝふ。
造られたる物は　一つとして　汝に知られざるはなく
　知らるゝものは　皆みてにまもらる。
なんぢ　まぶたを　開き給へば　志のゝめあり、とこしへの
　光は　彼等のために　輝やき
　つきざる河は　流れて　野にあふれ　その林をうるほす。
彼等は朝毎に　新しき光に　翔りつゝ　汝の威稜をうたひ
　夕べには　反り來りて　また　汝の翼の　かげにいこふ。
汝のことばは我儕の　生命なり、
　汝の祝し給へる地よりほかには
　　やどるべき家もなく
　　よるべき國もなし。
わが神　わが神　ねがはくは　羞を　わが眉より　取りさら
　しめよ、
さらば　我儕は　汝の榮光のうちに　汝の　み面を歡し
　むことを得む。

血涙文字

歌ふと云ふすら、間のありげなるが心地わろし、人に見するてふ文章に至つては、虚僞の多きぞ其常なるべけれ。及かず、心を開きて心に寄する熱誠のふみが、直ちに底縕をつくして、むき出して眞實なるには。玆に、近日の來書の中に就きて、稍や公けに示すに妨たげなきもの二

片を掲ぐるは、文界に多くは得がたき眞面目の情熱を世につたえんとて也。

（其一）

沈痛の情やむ時なけれど而かも又感激の謝念斷ゆるひま無く候、一身の既住を回顧して現在に及べば泣いても足りぬ程の感有之候。

玆に竊みて多難多望なる明治二十八年を迎ふるとを賀し奉り候。

斯かる千古未曾有の時世に生れ合はしたる偶然にあるまじく、大頓挫爲すなき可憐の身を顧みては悲痛やるせなけれど、何時迄斯くてあり候可き、よし半死半生の生涯を送るとも、年少の血と涙と惣べてのものを靈界に集注傾盡して古聖の足跡を趨ひ學ぶ可く候。

年來の高き御交誼、御兩所より辱ふせる御知遇、永遠に忘却すまじく、今後如何なる境遇に餘生を送るも、屹度クリスチャン歩いたす可く覺悟せられ候。四顧茫茫たる人生の枯野に主イエスに伴はれつゝ歩みゆく、深邃なる而しながら健實なる快樂の斯くの如きはあるまじく存ぜられ候。貧血枯骨のうち猶ほ存する人間の血性と熱情とを聖なる供物として同胞に献げんのこの志望、全國を擧げて大勝利のかしこに目注くの秋、われは見えぬ聞えぬ知る無き方途に佇むにて候。われらは靈まと能らざの大なる働らきを確信し、クリスチャンたりしわがこれ迄を解脱超越してまことにくクリスチャンたる可く立志せられ候。俗人の名利に於ける程の熱情確志を靈界に致して見度、それには餘命いく程もあらぬ病身の好都合に御座候。よし皇軍大敗するとも劍に起ち得ざるを歎かじ。われはわが使命の〇〇に適歸して終始いたすべく候。いよいよますます確信せらるゝは靈界の經驗に御座候。ますますいよいよ感悟せらるゝは人生のミゼラブルに御座候。われは今誠に樂みを樂むべく希はず、但だこれ主イエスの血の涙を悟り度一片知りそめたる天地人生の此の「まこと」の爲めに艱み苦しみ寧ろ死に度のみに御座候。付けても斯かる果敢なき身のさま得堪えぬ程に歎かれ候へど、能くく思へば歎く可きより大なるもの有之候。

（其二）

小弟が今日の寂しき心情は其原因甚だ錯雜致し居りいま申上ぐるも唯だ清聽を汚すの恐あるのみなればいまさらかへらぬ愚痴は申まじく候あゝ小弟は心中の感情に堪へずして是を詩に洩すが故に思想錯雜し句常に滅裂靜淑の趣味を欠き申候。愛兄の御好情に對して返書を捧げんと數日來苦考して一も益なく筆を取れば亦々腦中錯亂して何を申上くべきや一も順序なく自身ながら實に恥入り申候。小弟始め非常なる憂鬱に沈み厭世思想に驅られて殆ど病人の如かりしも自然に導かれて自然な人性と漸く自然の内に現はるゝ愛を感じ申候ひしが近比に至り自然は愈活物と相成り自然は常に愛を以て人類を慰め居るを切感し自然の中に身を投ずる時は全く世を忘れて無邪氣無我なる幼兒となり平生狂する如き我靈は全く母の懷に入り眠るが如き心地致し深く天父の御慈愛の厚きに感謝致し候。昔日唯た美しと見たる菫撫子の如き野花も今はいふべからざる深き詩情を有し幼き妹の如く互に愛するの心起り手折りたくまた手折るに忍びず終に手をふれずにかへる樣に相成り春の夕など霞のうちに消えゆく遠山のなつかしくして殆ど清き處女の死するが如き心地せられ夕露に袖の濕ふを覺えざるとさへ多く是あり候。生命は愛なりといはれし内村氏の心は實に同感の至に候。小弟は益愛は神性と人性の一致調和する處にして基督は此愛の化身に在ますを信じ我は途なり生命なりといひ給し御心の程を幾分か解するを得申候。愈ゝ靈界と此現象界とは愛の内に一となりて愈ゝ密接なる者となり小弟には殆ど區別なき程に感ぜらるゝと有之候。ステッド氏が幽冥界の隔絶何かあらんといはるゝも尤にて小弟は氏と共に深く世人がスピリチュアリズムに注意せざるを怪しみ申候。靈界と愛の交通自由なるに何ぞ音信の能はざる理あらんや。隔の離は肉躰なるに此世に在りてすら互に言語に由りて思想を通ずる者をいかで肉躰の隔一重だけ少くなりし時却て疎遠となるの理あらんや。畢竟弟等の心靈鈍くして感ぜざる者と存じ申候昨春深く逝きにし人々を忍びてうたひし者是あり候既に御覽に相成候やも知らざれども貴覽に入れ申候。

夜半

かたわれ月の　影おちて　山もと暗く　なりにけり　風もいつしか　絕はてゝ
虫のこゑのみ　殘りけり。
うき世のちりの　おさまれば　淸き自然の　かむばせに　ゆきにし人の　面かげ
も　天國のさまも　見ゆるなり。
罪のひゞきも　ゑづまりて　靈のこゑさへ　きこゑきぬ　とこ世の如き　空見れ

ば　星はしづかに　またゝきぬ。
うき世のちりの　あさたえし　夜中の愛には　くもりなし　愛は心の　つばさなり　此世かの世の　へだてなし。
愛はとこよの光なり　愛をみ性の　人の子に　死もとこしへの曉に　あけゆく夜中の　ごときのみ。

御黙示の如く人の悲觀的に陥入るは全く人外別に天地の生命あるを忘却するに依り小弟の如き實に天父の聖愛を生命として不動の信仰に立つ能はざるに依り斯くは自己を厭ふ自分ながら腑甲斐なき者と相成り申候。誠に小弟は心靈界の敗卒にて肉心共に損傷を蒙り不健全なる者と相成り一方に於ては冷靜ならんとし一方に於ては沸騰しつゝ有之候。殊に今日の神學説など一層の不平を與へ申候。小弟不肖熟々實驗よりして考へ申せば普通の學術と異り神學は必らず實地の試驗を通過せざる可らず誠に人生に一大影響を與ふる死の試煉に遇はざるうちは決して容易に信じ得べからずと思はれ申候。彼の徒に大言壯語する新神學者等が果して頑固陳套と侮る舊神學者等に勝りて高尚偉大の德義心を有せらるゝや否や。弟の見聞する處に依れば往々神學説を應用して慾を肆にする遁辭とせらるゝ人あるが如し。かくの如くして到底生命ある基督教を熾ならしめ得べきかと小弟疑ひ居り申候。寧ろ天然の愛に歸りて天父の御性を眞覺し實行に依りて基督の愛を悟り死生の境遇に遭遇して永遠無久の生命の奥義を味ふに若かずと感じ居り候今日の問題は決して基督の神たるか人たるかの論にあらず有神無神の論にあらずして直に人の靈性を有するや亦人の知識と自覺とは眞なりや宗教心は全く誤謬なりや否哉の論と思考致候かくいふ內にも小弟は自から自己に耻ぢ居り申候。嗚呼此熱くもなく冷かにもなき此軟骨動物主は口より吐き出さんと欲し給ふなるべし。亡友○○○なる人追想せられ候。彼の友の一生など實に社會の不平均を益々感ぜしめ候是に就きて彼の天無情及び犠牲の二卷を公にせし高安氏の御一生も心配に有之候小弟は未だ右二卷は拜讀の榮を得ず唯僅に氏の筆になれる短文を見たるのみに候へ共一種いふべからざる凄味を帶べる人生觀を抱き居らるゝを發見致し候。此の如きは到底世に入れらるゝことなし巧妙の度增せば增す程世俗に嫌はるゝならんと存候。然し凡て悲觀的文は眞面目なるは弟の深く喜ぶ處に候我國人は兎角眞面目ならざるは小弟の遺憾と思ふ處に候。小弟が透谷子に敬服せしも多は此點に有之候。早稻田文學に氏を論ぜられし一文深く同感に存候。透谷子逝かれてより「處女の純潔」などの如き清高なる思想多く見られずと小弟は遺憾に思居り候。此處に小弟の願一つ有之候そは外ならず小公子の後篇の世に出でん事に候日々待ち居り候へ共未だ現はれず病氣にても有之候哉奉伺候彼の書の如き愉快なる書は未だ拜見したる事無之彼の著者と共に譯者の御心勞深く此邪氣多き社會に良藥を與へられし御功勞實に感謝に堪へず候。

偏者云く、ハリス夫人は、もと日本札幌にあり。現に米國桑港に居て、吾同胞に合力せらるゝこと尋常ならず。シカゴ大博覧會に出席せし僧侶某すら、其の英文章は、同夫人の助力によりて成りしと云へり。左の一編は同夫人が寄送の英文を譯せしもの也。

女學雜誌記者足下

小妹事玆に貴欄を愛讀せらるゝ御婦人方に對し數言の祝辭を呈し度御受納の上貴白に御掲載被下候はゞ幸甚に存じ候。先頃クララ、バートン孃より書記の手を經て貴國に關し就中貴國に於ける赤十字社の目覺ましき現時の御働に關し熱心溢るゝ計りの書面を戴き申候。

御承知にもあるべけれどもバートン孃は米國のナイチンゲールとも稱せられ三十年前南北戰爭のありし際國家に忠勤を盡されし女傑の一人にて只今當國赤十字社の會頭と仰がれ而かも貴國とは淺からぬ緣ありて貴國が斯くも速に萬國共通の慈善隊に加盟せらるゝに至りし事に就き孃の力は預つて大なりし事と信じ候。貴國に於ける赤十字の成効せる御働に對して持たるゝ孃が喜悅は吾等凡て日本の朋友にして然も博愛の事業に心を盡せる者の切に同和する所なるは今更申上る迄も無之候。日本に於ける姉妹等は現時實際的博愛の精神をば美事勇氣と謙遜てふ貴國固有の美德に加味し、斯くも勇ましく万國の前に日の出の國旗を打ち靡かせ給ひける日本男子の國とし、妻とし同胞として長く記念さるべき芳名を貴國の歷史に留め給ひぬ。我等曩に貴姉妹等の進歩を見聞したりし折節猶ほ一層の偉業あらん事を期したる者は今回又新たに其進歩の證明を得て益姉妹等の眞價を知る事を得申候。願くは今涙と共に播かるゝ愛と犠牲の種が此新たなる年の中に凡ての家族に幸福と平和てふ花に咲出ん事を。

斯く申上ぐるに付けても思ひ起すは今頃貴國にあつて凱歌を唱ふる下たにも悲哀の涙に哭れ給ふ姉妹あるの事にて候。實に貴國の詩人福地源一郎氏が歌はれし帝國萬歲萬々歲なる活躍文字を讀むにつけ、過日東京に催されし第一祝勝會の歡天喜地の其中に建立せられし招魂碑の事を想起する事を禁ずる能はず候。人情は何處も同じ事にて五指同心とか申して貴國の人民が涙と共に祈誓燒香以て戰死者を祭るなど猶基督信徒が憂苦あるに當つてキリスト（神の愛の最大なる顯現）に來りて助と力と慰を求むるに異れる所無之候。而して喜憂交も至るの時に際して天慰を求むる忠誠なる思には必ずや萬國萬民の父なる神が力と勇とを添へ給はん事を信じ申候。戰地に於て必勝を期せしむるは內に愛國忠君のホームあればにて候へば實に之を治め給ふ姉妹等は勇士の刀劍にも優りて力ある者に候はずや。妹一個の基督教徒としては國事萬端平和の談判を以て事濟まん日の速かに來らん事を切望して止まざるものに候へども現時の世界の狀態によりてはまた義戰てふ事もあり得らるべき事と思考仕候。

戰爭の事に及び候まゝ貴國に對する當國の感情を些か申上度候。旅順占領の頃まては米國全躰の同情は貴國と共にありし。他國の事は知らず我國に於ては只貴國が義戰の止むを得ざるに至りしを悲しむのみ。日本が博せし名譽を寸毫も毀損するの思念は無之候ひき。又旅順占領の事跡に付ても日本の兵が殘暴を恣まゝにせしとの風聞を以て日本の開化は外形的のものなりと速斷するとは米人が贊同する所にては無之候。古今の歷史に通ぜる者は斯かる過失に對しては一樣の說明を與ふべき事と信じ申候。即ち人性の自然に屬するものにして天の下何處如何なる境遇にても顯はれ易き弱點の然らしむる者なりとの事に候。妹事在米の日本國朋友の一人として旅順事件に關する我國民の迷霧を開かんが爲め近頃一文を草して東部の諸新聞に寄送せん事を計り申候。微かなる燭光も亦幾分の光輝を放つべく候へは妹の文拙なくとも亦幾分か貴國の御爲めにならんかと存居候處ワシントン府の模樣も好況にて日本國朋友が勢力其反對者の上に出でたる事を知り妹の拙文を投ずる事は見合せ申候。然しながら御雜誌の讀者をして我等日本の眞友が此事件に對して如何なる感想を抱き居候やを御知らせ申さんが爲め左に妹が草せし原稿の一部を拔て御一讀を煩す事と致し候。

公平無私なる我讀者は何ぞ恠まん、彼の教育ある日本人が我國に來り、內部に潜布せる社會道德の元動力及び基督教的博愛の事業等を見聞するの機を有せず、只其皮相を看察して適〻我國か自ら基督教的開化國と誇稱するの不當なるに驚くとあるを。

言ふ勿れ日本の文明は外形なり皮相なりと。何れの國か能く皮相たらざるなきを保せん。佛國に革命の爭亂あり紛擾あり以て開化國と稱すべからざる乎。印度なる英兵は彼の救世軍の如く寬仁大度なるや。大英國も時に觸怒甚たしきに至らば古代の蠻心を發する事なからずや。以て英國は半開化なりと云ふべき乎。西部の米人土人の亂暴に激して復讎の念盛なり、以て米國を野蠻國とする乎。旅順口に表はれし慘狀は日本人の眞性を示せるに非ず、人間一般の眞性を表はしたるなり。

末ながら我等基督教徒は此戰爭が遂に東洋の一大利益となり物質上のみならず生活上思想上に今後非常の進步を生ぜん事を固く期し申候。今謹んで日本が神の軍旗となり東洋從來の固陋と迷妄と頑愚とを破らるゝに至りしを祝し申候。玆に姉妹等の御働きに神恩の優渥ならん事と其悲哀に對して妹等の切なる同情を證明し併せて日本帝國が天佑の許に萬々歲ならん事を祈り申候。

合衆國カリホルニヤ日本基督教會々員

米人　フロラ、ピー、パリス

片々

●皇后陛下の御眷護

皇后陛下には今般佛國赤十字社佛蘭西婦人協會より捧呈する所の治療具見本一式戰時看護婦教課書一部を嘉納あらせられ直ちに該品を香川皇后宮大夫を經て日本赤十字社に御下附の御沙汰あり。

皇后陛下　軍人負傷者看護佛蘭西婦人協會は爰に謹で　皇后陛下に嘆賞の意を表す蓋し陛下が目下日本赤十字の事業に鋭意從事せらるゝは實に宇內慈善業社會に巨大の反響を爲すべく依て佛蘭西婦人協會は其本國保護者の爲めに製造せる治療具見本一式及び戰地看護婦の教課書一部を容れたる一箱を捧呈す陛下幸に之を嘉納せられ婦人協會か日本帝國の慈仁皇后陛下に對する微衷として叡覽あらんとを希望す

千八百九十四年十月一日巴里府

佛蘭西婦人協會に代り

總裁伯爵夫人　フーシエードカリー

書記長　ドクトルデユショーソン

物品主任總裁夫人　エムピノー

日本國皇后陛下

●高等女學校規程

一月廿九日、文部省令第一號をもて定められしもの如左、

高等女學校規程

第一條　高等女學校の科目は修身、外國語、歷史、地理、數學、理科、家事、裁縫、習字、圖畫、音樂、體操とす、又隨意科目として教育、漢文、手藝の一科目若くは數科目を加ふることを得外國語、圖畫、音樂は府縣立學校に就きては、文部大臣の許可を受け其の他の學校に就きては地方長官の許可を受けて之を缺くことを得又生徒の志望に依り之を課せざることを得

第二條　高等女學校の修業年限は六箇年とす但土地の情況に依り一箇年を伸縮することを得

第三條　高等女學校の第一年級に入るべき者は修業年限四箇年の尋常小學校の卒業生若くは之と同等の學力を有する者とす

第四條　入學生徒の資格を高むるに從ひ第二條の修業年限を三箇年までに短縮することを得

第五條　教授日數は每年大約四十週教授時數は每週大約三十時とす

第六條　高等女學校の學科目程度は左の如し

一　修身

教育に關する勅語の旨趣に基きて人道實踐の方法を授け兼れて作法を授く修身を授くるには躬行實踐を旨とし務めて貞淑の德を養ひ起居言語其の宜しきに適せしめんことを要す

二　國語

初めは普通の漢字交り文を講讀せしめ漸く中古以降の平易にして雅馴なる文章及歌に及ぼし又日用書類記事文等を作らしめ兼れて文法の大要を授く

國語を授くるには發音及句讀に注意し讀方話方に習熟せしめ文章を作らしむるには簡明着實にして達意を旨とし文題は務めて實用に適するものを撰び文法は講讀作文教授の際其の他便宜の場合に於て之を授くべし

三　外國語

讀方譯解習字書取會話文法及作文を授け普通の文章を讀み及簡易なる會話及通信等を爲すことを得しむべし

外國語を授くるには常に其の發音を正しくし及其文法に注意せしめんことを要す

四　歷史

本邦建國の體制　皇統の無窮　歷代天皇の　盛業忠孝貞淑の事蹟學術技藝の隆替風俗の變遷等に關する事項を授け兼れて外國歷史の大要を授く

五　地理

鄉土の地理より始め漸く之を擴めて畿內八道の地理及本邦重要の關係ある諸外國の地理を授け傍ら地文の大要を附說す

地理を授くるには人生に適切なる事項を知らしむるを旨とし地文に於ては成るべく本邦の事實に依るべし

六　理學

筆算に依りて整數分數小數の加減乘除並比例百分算を授け兼れて珠算に依りて加減乘除を授く又開平開立の一端及幾何の初步を授くることを得

算術を授くるには運算の方法及理由を理會せしめ日常適切の問題に就きて其の應用に慣れしめ兼て暗算速算に習熟せしめ又幾何を授くる際には兼れて求積法の一端を知らしむべし

七　理科

學校所在の地方に於ける天然物及現象に就きて端緒を開き漸く通常の植物動物鑛物性質効用等を授け又物理上化學上重要なる事項を授け兼れて人身生理及衞生の大要を授く

理科を授くるには實地の觀察に基き若くは標本模型圖畫及實驗等に依りて正確なる知識を得しめ日常の生活及生業上に資せしめんことに注意すべし

八　家事

衣食住家計簿記家事衞生育兒其の他一家の整理經濟等に關する事項を授く

家事を授くるには成るべく實習せしめ務めて實用に適せしめんことに注意すべし

九　裁縫

運針法縫方裁方繕方を授く

裁縫を授くるには實用を旨とし其技能に熟達せしむべし

十　習字

楷書行書草書及假名を授く

習字を授くるには字形端正にして運筆澁滯せざらんことを旨とし且普通文書の書方に習熟せしむべし

十一　圖畫

實物模型手本に就きて自在畫を授く

圖畫を授くるには位置形狀濃淡等其の宜しきを得せしむるを旨とし時々自己の意匠を用ひて作らしめ又便宜彩色の法を授くべし

十二　音樂

單音唱歌及複音唱歌を授く又便宜音曲等を授く

音樂を授くるには歌詞樂譜の高雅純正にして教育上裨益あるものに就きて練習せしむ

十三　體操

普通體操若くは遊戲を授く

體操を授くるには精神を爽快にし身體を健康ならしめんことを務むべし

十四　教育

教育の原則教授の方法等を授く

十五　漢文

經史記傳等の內平易にして雅馴なる文章を講讀せしむ

十六　手藝

土地の情況に依り女子に適切なる手藝を授く

第七條　高等女學校に於ては生徒卒業の後尙二箇年以內其の學業を補習せしむることを得

第八條　中學校令第十四條第二項に依り高等女學校に技藝專修科を置くときは其の學科は第一條第一項の學科目中一科目若くは數科目を缺き技藝に屬する某科目を加ふるものとす但修身、國語、裁縫は之を缺くことを得ず

第九條　第四條に依り修業年限を短縮せんとするときは文部大臣の許可を受くべし但郡市町村立又は私立學校に就きては地方長官を經由すべし

第十條　高等小學校正教員免許狀を有する者は高等女學校に於て上の三學年の學級を除き其他の學級の教員たることを得

第十一條　本令に依らざる學校は高等女學校と稱することを得ず

第十二條　既設の高等女學校は明治二十八年八月三十一日まで本令に依らざることを得

◎大日本海外教育會長　押川方義氏は、去る十三日渡韓せり其の歸朝を待ちて、大に會務を同胞間に訴へんと期す。

◎外山先生の神代女性　を讀むとして、井上哲次郎氏が評したるものに云く、我邦の神話も一代に成るものにあらずして幾千百年を經て始めて成り其中には種々なる元素を含有するとなれば、父母干捗の風俗ありし痕迹を全く否定せざるを反りて妥當なるにあらざるかと。自由結婚のみ行はれしにあらずと云ふ也。夫れ、神代の如き時代にありては、所云る自由結婚の行はれしよりは、父母干捗の行はれし方が進化せる證徵ならずや。二先生、何んぞ斷言するの勇なき。

◎基督教育年會寄宿舍　增築の爲めに資金を募集せらるゝに合力せんとて、木村かめ子、松村梅代子、丹羽すい子の三女史發起し、一ヶ年間を期して金二百圓以上を募集せんが爲めに每月一回音樂會又は（小）（曾）の如きを催ふさるべく、初會は三月二日府下美土代町青年會館に於て開かるべし。

◎明治女學校英學教師　米國ケンタッキー州なるアーリングトン市立學校の校長たるアリス、ミラー女史は、日本の女子教育に餘生を獻げんとの志を立て、明治女學校の組織精神を聞きて同情を表し、此に來助して其志を遂せんとて、今月初めの入港汽船にて恙なく到着せられたり。

◎朝鮮王妃の居動言行　ニウヨーク、ヘラルドに米人の觀察によりて細かに記載されしもの、少年園第百五十號（一月十八日發）に見ゆ。一讀の味ひあり。

◎救世軍元師ブース氏　近頃の演説に曰く、吾黨が街衢の間だより救ひ出せる忌まはしき女子は、三年間保護教育して之を試ろみるに、其の百人中の八十人は悉く品行確實なるものとなれり、而して之が爲めの特別入費は十六弗にて可なり。貴婦人もし一衣を節し、一ボンデットを買はざれば則はち此の善事業を爲すの料を得べしと。

◎女子に適する軍歌を　製すべしとは、教育時論が時事に感慨したる注意なり。

◎高等女學校を增設して賢母たるべきものを養成するを須要なり。一縣に一校乃至二校位は、高等小學四年と尋常中學二年とを通じたる如き學科程度の高等女學校を建設せんことを望むことなれども、左れども現存せる師範學校女子部を廢して高等女學校を設くべしと云ふものにあらず、只だ餘力あらば可成く之が建設を希望するもの也（寺田勇吉氏）。

◎俗吟寧ろ眞情を寫す　園珍子の都々逸に曰く、胸のたき火で涙をせんじ癪にのまして寐るつらさ、と。閨怨の情を察すべし。

◎九州評論の流水庵子　が新躰歌朗吟すべきものあり、

ばら〳〵と芭蕉の葉音ひそめくは、軒まもる夜半のおづくと思ひしにあれ見れば疊にうつる松の影あれ聞けばさやかに響く笛の聲、雨なりさきゝしは庭のさびしきに、露ふみて舞ふにやあらん夜の神、笛吹くはさやけき日にもの思ふ、戀人の、心こめたる歌ならん、いざやいざ我に同じき恨をば、彼の君へ、琴さりいでていらへせん。

又た、佐藤森谷が「道」のうたも、凡ならぬ錦腸をおめす。世上まことに新詩人多し。

◎「世光」雜誌亦有詩人　野梅が「斥候騎」に、

殘月青く風さへて、篝火暗き野營の前、馬に鞍置くますらをの、かぶとにう

つる星のかげ。つるぎか、矛かはた霜か、野邊の白露ふみわけて、たどる姿は朝ぎりに、遠く消えゆく蹄の音。

◎井上前文部女子教育　舊臘熊本の知人に寄せし同子が書狀の一節に云く、

尙絅女學校の結果熊本の女子の風俗に許多の好影響を及ぼしたる由承り候女子教育も亦た富强の本也從來女兒のソダチ方は支那細腰の風と舊幕の時オイランの眞似をしたる惡俗の爲にオモチヤ流に拵へ候ものに有之美觀盛粧は十五歲以上に必要なるも小學校通ひの女兒は男兒同樣に有り度ものなり弱女不孕强兒、女子の衞生は尤も要件也生の賤兒に靴を用ひさせ申候處別紙御笑覽被下度候云々（別紙如左）

御兩親樣御氣げん能くいらせられ御めで度存じ上候私共くつはいて學校へゆきますと二十分は早くまいり候御申こしの食物の事は三人ともかしこまり候

十一月二十九日　ふじ　さき　いさ

御兩親樣

◎ウイラード女史去月　オハヨ州ウエスレアン大學より、大博士(L.L.D.)の學位を受けたり。同校長は之につき一場の演說を爲したり。

◎在廣島病院看護婦の　總數は百四十名。篤志婦護婦は十四名。東京赤十字社本部より三十三名、岡山支部より二十一名。京都支部より三十名。廣島支部より十四名、長崎熊本支部より各八名と秋間爲子の報あり別項參看。

◎神戶外國婦人慈善會　昨年中の報告によれば前年の繰越金に合せ義損金合計四百四十五弗四十七セン。此內、慈善の爲に用ひし高二百二十五弗五十センにて殘餘金二百十九弗七十七センありと。役員撰擧の結果　マクタビツシ夫人、ルーカス夫人、フホンクレンキ夫人、フビシヤ夫人、スワン夫人、アベル夫人等を委員とせり。

◎瑞西の女子教育近況　瑞西の大學校は、前學年に於て三十人の女子に「ドクトル」の學位を授與せり。又「ベルン」大學に七人、「ゲンフ」に一人、「ツューリヒ」に六人の女子卒業者あり、就中八人の婦人は醫學に於て、五人は理科哲學に於て學位を請求せり、醫學に於ける學位の論文は、廣く醫學一般の事項に就て論究し、理科哲學に於るものは、植物學及博言學に就て論したるもの多し。其論題の面白きものは、「アンナ、ミクツォルコルスカ」及「イョセファ、コーザス」の二孃なりとす、前者は「ショッペンハワー」氏の人生自由論と「カント」及び「シエリング」との關係を論し、後者は「アッパーセプション」の觀念に付該博なる論文を草せり、「ベルン」大學に於ける七人の醫科論文の中、四人のは「ウヰルヒヴ」氏の紀要に採錄されたり。此等の女博士の多くは「ポーランド」人若しくは普國人にして、「クララ、ヴァイス」夫人のみ普魯士人なり、又其多數は未婚の婦人なりと云ふ。

（哲學會雜誌）

◎甲州郡內婦女の勤勉　甲州南北都留兩郡は甲斐絹の本場丈け年中絕間なく機業に從事するが故に每月各所に開かるゝ市日每に多少纏りたる金員を得ることとなれば人民の懷中常に幾千の餘裕を存し居ることとなるが其の人民の勤勞も亦た他地方より多く特に婦女の勤勉は到底目擊せざる者の想像し得難きほどにて朝東天の白む頃より夜は十二時に至るまで機臺を下らず終日間斷なく手と足とを動かし極寒酷暑の嫌ひあるなし近來甲斐絹の聲價海外に揚りて頓に輸出を增加したる所以のものは偏へに郡內婦女勤勉の結果といふも可なり更に該地方の男子の爲す所を見るに婦女の手に成る製產物の販賣と家事整理とに身を托し婦女に比しては寧ろ安逸の地位に在るものゝ如し去れは女權も亦た案外に擴張せられ上野原邊の諺に「嚊天下と鹽饅頭」と云ひ該地の名物素的に大いなる鹽餡の饅頭と女房の威張方の大なることと對比せり併し乍ら勤勞に實權の伴ふは自然の結果なれば亦た致し方なき次第なるべし。（山梨日々新聞）

◎阿波技藝女學校設置　阿波國に女子の中等教育を施行する所なきは常に識者の痛嘆する所なるが阿波國教育會にては此に見る所あり本月五日同會員伊藤貞勝、小堀源、上田芳之助、一宮育太郎、岩佐直、森萬吉、玉田利一郎、原田周之、松原庸吉の諸氏に木間瀨會長より技藝女學校設置要項取調委員を囑托せられたりと云ふ。

◎高知縣下丹陵婦人會　香美郡赤岡村に於ては此程重立つ婦人二三名の周旋に依り丹陵婦人會を設立せしが會員三十餘名にて深く輕跳浮薄擧動を相戒め婦德を磨き公共の爲め應分の運動をなす目的なりと云。

◎小樽婦人慈善會設立　小樽港の進步に隨ひ近來種々社會的計畫の續出するを見る全地の早川兩三氏等は小樽婦人慈善會設立を企たて昨今專ら有志者間に遊說中の由該會設立の趣旨は玆に說明を要するまでもなく會名に由つて知らるゝ如く慈善博愛の主義を以て政法の及はざる所を補ひ社會の平穩圓滿を期圖するに在り從來本道は府縣に比し遺利多く各自其職に從事し夫れ相應の賃錢收入を得て生活の程度も比較的優等なりしが漸く戶口の滋殖するに隨ひ各賃錢の如きも段々低落して自然に貧民を生せるは免れさるの數にして小樽港の如きは元より日の出の勢ひにて年々隆盛を極めつゝある事なれば一般に斯る窮民なからん事は勿論なりしと雖も又た多數の中には病氣其他の不幸に由りて非常の困難に沈淪するものなきを保せす故に此際慈善會を組織して各會員より月額二十錢以上五十錢までの會費を徵收し病氣治療の資に乏しきものあれば實地を調査して藥料の全額又は半額を施

與するを始め其他會運の進むに従ひ種々博愛的事業を實行する計畫なりと

◎秋田婦人學會の近況　は明治二十二年の創立にして爾來連綿今日に持續し、追々眞成績を呈する由なるが、同會の目的は婦人の日常心得べき學科を修め兼れて其の品格を進むるにあり。會員は三種あり名望家にして會の主旨を贊成するものを名譽會員とし、維持の責に當るものを特定會員とし、學科を修習するものを通常會員とす、通常會員は會贊として一ヶ月金五錢(薪炭を要せざる季節には三錢)を納むるの定なり、修學年限は三個年とし、讀書には讀本の類手紙の文を用ゐ又作文を授け、算術には珠算を用ひ加減乘除法相場割利息算家内の帳合を授く、裁縫は各自家に在りてなす所なれば全く之を省けり、而して修業は毎日曜日午前四時間なり、是れ所謂日曜學校とも稱すべきものにして市内の一小學校舍を以て之に充つ。

◉レヂー、コングルトンの開書

左の開書は前號の廣告欄内に見ゆ。吾人は其眞實なるとを贊證し、其要求によりて再たび玆に掲載す。

レヂー、コングルトンは日本の女學雜誌に於て其友人ミス、マクレーンが最も潔白無私なる所業に就き却て反對なる誤謬の報告ありしを聽き甚た心を勞せり、ミス、マクレーンは其一身を日本の爲に獻けたる最も親切の友人として十有餘年の間ロンドンに來る處の日本人を導き助け又日本に於ても同樣の働を爲せるとは皆人の知る處なり、レヂー、コングルトン幷に他の多くの英國の友人等は其全き信用をミス、マクレーンに措き且つ同女に對せる園照夫人の訴訟は理由なきとして却下せられたるとを證明す、此訴訟の裁判は一八九三年八月卅一日ロンドンに於て極て丁寧に開庭せられミス、マクレーンは一々明瞭に答辯せられて其無實の申出を表證せり、然に園照夫人は今日に至り再ひ其無實の事を言ひふらすとは誠に正しからざる所業なり、レヂー、コングルトンは斯かる所業を不憫に思ひ且つ苟も眞理と正義とを重んずる人は日本に於ても亦英國に於ても斯の如き根據なき誹謗に向ひ些少の注意も惹き起さゞるとを信ず、

一八九四年九月廿日

佛國ドロームの旅中にて手記

連署

レヂー、アウグスタ、インスタイン

レヂー、キアリク、プキアナン

ミツセス、エミリー、サラ、パルスフォールド

各手記

◉世界婦人禁酒會頭の召集

會頭ウイラード、全世界の同志を召集するの文一篇を吾社に寄せらる。譯して、紙上の同人に示す。

各國にある白標婦人　親愛なる共働者

婦人禁酒軍は實に豫想外なる進歩をなし今や至る處いづくの國如何なる都にても此會の設けあらざるなく母たり妻たるの人共に相携へ相助けて家庭の內を高潔にし神聖にし以て其惡風を矯正し弊習を釐革するに孜々たるは普く人の識認する處なり。彼の世界各國の帝王或は其政府の下に請願したる家庭釐正の事の如き斯く地の全面に散居せる同主義の人をして愈近親の思ひを持たしめたるに止まらず併せて幾百万人の心を喚起して酒及び阿片買賣の廢止、女德の保護等に關する社會問題に對して共に有力なる贊同と協力とを與へしめたり。實に婦女子の手になれる事業として古今未曾有の美擧なりと云ふも不可なかるべし。「何事もなせ」てふ防禦、教育、傳道、社會、及び法律上に於ける白標運動の政略は全世界各地に散布せる五十万餘の會員の實踐躬行する處なり。其中には實際の會員たる婦人あり名譽會員なる男子あり又神と家族と國家の爲めと大書せる旗幟の後へに進行せる靑年あり小兒あり」宗派を限らず階級を撰ばざる此運動は實にプロテスタントたると天主教たるとの別なく賤女と貴女たるの分ちなく均しく之に贊同し協力するところなり。然して斯業の爲に世界各地に於る正午の祈は夙に宗教家博愛者の共に順守するところなり啻に神力の出て降るべき路筋の開けたるのみならず實に共働者の心を連貫し結托し奬勵するの一大便宜を與ふる機會とはなれり。見えざる世界は之れ實世界見えざる力は之れ眞の力。我等若し世を調和する事を以て自ら任ぜば己れ先づ此靈なる全世界即ちキリストの所謂「然らざればわれ兼て汝等に之をつぐべきなり」と云はせ給ひし御國に住しかの天使と共に「地には平和人には惠みあれ」てふ讃美に我等の精神を調和せしめざる可らず。

我等此精神此主義を以て玆に來る六月十四日より二十一日を期して世界の中心ロンドン府に於て大會を召集す。基督の愛につながるゝ者來つて共に今後の方針を議し各國をして其風俗法律政治の上に於て愈家庭に保護を與へしめんが爲めに計る處あるべし。

憲法第七條に曰く

二ヶ年一回の大會は行政官各國書記會計諸部會の會頭、機關新聞の發行人及び記者並に各一千人の會員より一人づゝ派出されし代議士とより成立すべきなり。

英國ウーメンス、エソシエーションは我等と同時に其集會を開かんとす。各國にある我等が主義を贊成するの博愛慈善の諸會も均しく其代議士を遣はして此大會に參與せしめば我等の喜び何ものかよく之に過ぎん。

大會執行の順序

六月十四日ロンドン紀念堂に於て英國禁酒行政委員會。十五日萬國禁酒會行政委員會、十六日（聖日）午前エクセター堂に於て説教、午後兩禁酒會連合婦人會。十七、十八の兩日は英國禁酒會々議。十九日萬國禁酒會總會（此の會議には諸代議士の必ず臨席あらん事を希望す）。二十日英國禁酒行政委員會。二十一日、萬國禁酒行政委員會。

英國禁酒會々議は同會々長レーデー、ヘンレー、サモセット之を司どり、萬國禁酒大會に於てはフランセス、ウヒラード、嬢司會す。歐米の著名なる辯士を聘して演説を乞ふ事あるべし。加奈多、チーストラリヤ、南亞弗利加、印度、日本、支那、布哇。スカンデ子ビヤ及び他の諸國より有名なる先導者多く集會すべし。

然して我等この大會に先だち各心に備ふる處なかる可らず。是を以て我等同主義の人來る五月十八日を以て祈禱日となし、共に惠の御坐に來つて恩寵にあづからんとす。各地にある諸禁酒會共に此日を覺え、尚ほ翌十九日の聖日に相當せるを以て特に家庭に於ける女子の働に基づき説教會を開き、愈心に備ふる處あらん事を希望す。

願くは我等今聖靈の力によりて共に云はん「我等が受けし靈は懼の靈にあらず力さ愛さ確心の靈なり」さ

會頭　フランセス　ウイラード　　書記　エナ　ゴルドン
副會頭　イサベル　サマセット　　會計　ララ　ウイリヤム

⑤裁縫教授細目

渡邊辰五郎氏が裁縫教授細目なるもの左の如し

裁縫科第一年級細目表

運針　針目を一分五厘になして一時間小學生なれば廿尺以上六十尺迄小學以上の生徒は一時間に五十尺以上百尺迄縫はしむべし

同　針目を一分になして切地を二重或は三重四重になして三尺以上五十尺迄縫はしむ

穴かゝり　五分の穴になしては一時間に二つ以上七つ迄なさしむ凡三十箇程は

むり穴縢　目穴の二種さす

眞都利縫ひ　針目を二三厘になして一時間に一尺以上三尺迄なさしむ

西洋前掛　大人物雛形及實物一箇を五時間内外に手縫ひなさしむ

西洋前掛　子供物同前の如し

シヤツ　大中小雛形及實物雛形は二時中内外實物は四時間内外を費さす

ヅホン下　大中小雛形并に實物雛形は二時間中内外實物は四時間内外に縫はしむ

日本形　涎掛實物一箇を二時間内外に縫はしむ　但し上等なるは此限りにあらず

單襦袢　大中小實物一枚を四時間内外に縫はしむ

袖形及裙形　木綿或は絹布を用ひて五分以上の袖形一時間に三箇以上六つ身同裙形木綿及絹布を用ひて三分以上一寸位を一時間に二箇内外縫はしむ

袷中襦袢　實物一枚を六時間内外に縫はしむ

木綿單物　一つ身一枚四時間内外三つ身四つ身の類五時間内外大人物男女單物一枚を十時間よりして六時間内外縫はしむ

木綿一つ身二つ身三つ身四つ身前衿裁　袷雛形及實物は一つ身の雛形は四時間内外二つ身三つ身は五時間内外四つ身前衿裁は六時間内外に縫しむ

一つ身の實物一枚は十五時間内外二つ身三つ身は實物一枚を十七時間内外四つ身前衿裁は一枚を十八時間内外に縫はしむ

但し綿入は一枚に付二時間つゝ増す

女合羽　雛形及實物雛形は一枚を三時間内外實物一枚は八時間内外に縫はしむ

木綿物男女綿入　雛形及實物雛形一枚は七時間内外實物一枚は十五時間内外に縫はしむ

男女大人及子供の綿入及袷羽織被布　雛形一枚は五時間内外同實物は十時間内外大人物雛形一枚は六時間内外同實物は十二時間内外に縫はしむ

但し男女大人各五枚子供羽織二枚被布大人一枚子供一枚を縫はしむ

女鯨常の物　實物二本一本を仕立るに八時間内外になさしむ

男帯常の物　實物二本一本を仕立るに五時間内外になさしむ

女袴なし袴大人物及子供三種　雛形及實物雛形は一箇に付三時間内外實物は一箇に付六時間内外に縫はしむ

男兒馬乘袴　五つ子及七つ子雛形并に實物雛形は一箇を三時間内外實物は一箇を五時間内外に縫はしむ

右の細目は四月より始め三月迄に縫ひ揚くる者さす

同第二年級細目表

雌子類五枚　一枚を七時間内外に縫はしむ

單中重及木重　雛形并に實物雛形五時間内外實物は八時間内外に縫はしむ

長襦袢實物或は雛形　雛形一枚は六時間内外實物は十時間内外に縫はしむ

男女袷小袖各一枚つゝ　一枚を十五時間内外に縫はしむ

男女小袖重れ物各二つ組つゝ　男小袖一さ重れは三十二時間内外女小袖は一さ重れ三十八時間内外に縫はしむ

女襠あり袴大人物　雛形及實物雛形一箇は三時間内外に縫はしむ實物は六時間内外に縫はしむ

男馬乘袴　大人物及巾裁雛形及實物雛形は三時間内外實物は七時間内外に縫はしむ

通行雛形并に實物　雛形綿入一枚に付六時間内外實物は十時間内外に縫はしむ

木襲附襲各二枚つゝ　雛形或は實物　雛形一枚は十五時間實物は四十時間内外に縫はしむ

女鯨帯上仕立二本　實物一本を十五時間内外に縫はしむ

女丸帯上仕立二本　十二時内外に縫はしむ

男帯上仕立二本　一本を十二時間内外に縫はしむ

男合羽雛形及實物二　雛形一枚は十五時間内外實物一枚は十八時間内外に縫はしむ

股引雛形及實物　雛形一足は二時間中内外

足袋二足　實物一足を三時間内外に縫はしむ

男女綿入羽織各二枚ツゝ　實物十二時間内外

單羽織　雛形及實物雛形一枚に付四時間内外實物一枚は十時間内外に縫はしむ

蚊帳一張　雛形八時間内外に縫はしむ

大夜着一枚　雛形一枚に付十二時間内外に縫はしむ

布衣信一枚　雛形一枚に付六時間内外に縫はしむ

女兒洋服雛形一枚男兒洋服雛形一枚或は實物　雛形一枚に付七時間内外に縫はしむ

孤女學院報告

（明治廿八年）

第一月分

○寄附金

金拾圓　東京　無名氏
金貳圓五拾錢　仝　數寄屋橋教會日曜學校
金三拾七錢　京都　無名氏
金八錢六厘　東京　賀瀨氏
金拾五錢　仝　高木氏
金貳圓五拾錢　米國デラウエヤ州テモテ教會
金貳拾五圓　米國　無名氏
金壹圓　大阪　蕾照暗女學校有志諸氏
金壹圓九拾四錢六厘　横濱　英和女學校有志諸氏
金貳圓　東京　無名氏
金貳圓拾錢七厘　米國コンチチカット州パドック氏
金貳圓拾錢七厘　同國同州ケムプトン氏
金貳圓拾錢七厘　同國同州ミス、リチモンド氏
金參拾八圓六十三錢　同國ヴアルヂニヤ州リブル氏外有志
金貳圓拾錢　東京　明治女學校愛之睦
金五拾錢　前橋　マテヤ教會日曜學校
金壹圓九拾錢　山口　磯江直氏

合計金九拾五圓三厘

○支拂

金百九圓參拾六錢三厘　諸費用

第一月分決算

一金貳拾壹圓九拾四錢三厘　昨年度ヨリ越高
一金九拾五圓三厘　第一月分寄附高

合計金百拾六圓九拾四錢六厘

一金百九圓參拾六錢三厘　第一月分支出高

差引金七圓五拾八錢三厘　二月へ越高

○寄附物品

一小兒綿入　一　羽織一箇袖口十二
前かけ　五　東京　伊藤爲吉氏
一袴　一　仝　水野氏
一密柑　一箱　仝　井上氏
一仝　二箱　仝　無名氏
一女學雜誌教會評論
禁酒雜誌禁酒新報
わらべ每號六部ツヽ
婦人矯風雜誌　各社惠贈

○實業部

一金三拾壹圓八拾七錢壹厘　二月分賣上高
一金貳圓五拾壹錢七厘　前月ヨリ越高

合計金參拾四圓參拾八錢八厘

一金貳拾五圓四拾四錢三厘　一月分支出高

差引殘金八圓九拾四錢五厘　越高

總數現在員六十一名　外ニ外來教師醫師各一名

右之通リニ御坐候也

東京北豐島郡瀧野川村七百四十三番地

孤女學院

明治女學校

來る四月學年開始に付、諸級へ入校を許す
高等小學卒業相當の者は、本科二年に入る。
本科四年、高等科二年、月謝一圓二十錢。
本期役員教授性名左ノ如シ

役員

校長	巖本善治
幹事	八木兼辰
取締	吳くみ子
教務	小此木忠七郎
會計	福迫龜太郎
賄部主任	矢田きく子

教員

石川角次郎　星野慎之輔　吉住深山　塚本はま子　五島千代槌子　神中糸子　鈴木彬麿　ミス、ミラー
池田四郎次郎　戸川明三　竹內梅子　納所辨次郎　齋藤音作　鈴木弘恭　ミストル、アズベル
犬養銈之助　大和田建樹　塚本又喜　吳くみ子　島崎春樹　鈴木馨　ミス、スコット
校醫　鈴木彬麿

○規則書入用の仁は郵劵二錢封入御申越あれ

東京下六番町六番地　明治女學校

獨逸宮中顧問官○大日本帝國醫科大學名譽教師

勲三等ドクトル、エ、ベルツ先生創意

東京ホテル、山崎武八郎製造發明

定價 一合金四錢五厘

一合以上御報次第ニ配達可仕候也

專賣特許出願中

帝國大學御用

滋養肉粥

此滋養肉粥ハ「ベルツ」先生ノ創意ニヨリ武八郎製造法ヲ發明シ調製シタル者ニシテ凡ソ一ケ月間之レヲ帝國大學第一醫院ニ呈出シ鄭重ナル應用ノ御試驗ヲ經テ始メテ完全無缺本邦ニ比類ナキ滋養物タルヿヲ證認セラレタルモノナリ本邦ニハ本邦人ノ嗜好ニ適スルノ滋養物ニ乏シ二三十年來流行セシ尋常「ソップ」ノ如キハ重ニ西洋調理法ニシテ本邦人ノ嗜好ニ適セサルハ勿論其主要分ヲ驗スルニ一種ノ滋養物ト見做スヿヲ得ザルハ識者ノ喋々ヲ要セズ只一ノ嗜好品タルニ過ギザルノミ然ルニ此肉粥ハ本邦ニ産スル魚肉ヲ以テ精製シタルモノナルガ故ニ從來魚類食用ニ親炙セル本邦人ノ嗜好ニ最モ適シ且ツ多量ノ滋養分ヲ含有スルハ衛生試驗所ノ試驗成績ニ照シテ明カナリ

武八郎曩ニ英國ニ遊ビ倫敦ニ滯在スル十有八年其間彼我ノ食物調理法ヲ研究シ昨年四月歸朝シ爾來國家ノ爲メ常ニ微力ヲ致サント欲スルノ念慮止ムトキナク徒ラニ好期ノ到ラザルヲ悲メリ然ルニ今ヤ機熟シ運來タリ「ベルツ」先生ノ知遇ヲ忝フシ世間無二ノ肉粥ヲ世ニ公クニスルコトヲ得ルニ至リタルハ眞ニ武八郎ノ光榮トスル所ナリ故ニ武八郎ハ單ニ射利的ノ觀念ヲ去リ一意名譽ト責任トヲ重ンジ之ヲ試製スルヿ三十餘回遂ニ創意者タル「ベルツ」先生ノ滿足ヲ得ルニ至リタルナリ今ヤ此ノ社會無比ノ滋養的有效ノ發明品ヲ以テ社會公益ノ萬一ヲ效スヿヲ得バ武八郎ノ微意聊カ茲ニ達スルヲ得レ乞フ江湖ノ諸君御實驗アランヿヲ

山崎武八郎再拜

報告

依賴人 東京市麴町區有樂町三丁目二番地 山崎武八郎

第二百八十五號 魚肉粥 自製 右定量分析依賴

依賴人ヨリ分析ノ爲當所ヘ差出シタル本品ハ淡褐色粥狀ニシテ魚臭ヲ有シ氣味佳良ナリ而シテ之レガ定量分析ヲ施行スルニ其百分中含有スル主要成分ノ分量ハ左ノ如シ

蛋白質	七、二一七
蛋白質ニ屬セザル窒素	〇、二七二
脂肪	〇、五五九
無機鹽類(灰分)	〇、九七〇
内食鹽	〇、四四五
燐酸	〇、〇八二
水分	八七、二二三
澱粉	少量

以下定量分析ノ成績ニ依レバ本品ハ滋養成分ニ富ミタル良好ノ食料ナリトス

明治廿七年十二月廿八日 東京衛生試驗所

衛生試驗所技師 東京衛生試驗所々長 田原良純 印

衛生試驗所技手 主任 丸山長四郎 印

證明（譯文）

東京ホテル山崎武八郎氏ハ余ノ創意ニヨリ諸病者幷ニ諸病回復期ノ患者ニ最モ賞用スベキ魚肉粥ヲ製造セリ余ハ該肉粥ノ好滋養物タルヿヲ證明スルト同時ニ余ハ其應用ヲ世人ニ紹介スルモノナリ總テ魚肉粥ハ心機ヲ強壯ナラシムルカアリ然レドモ余ハ特ニ濃厚ナル斯ノ肉粥ハ尤モ滋養アルモノト信ズ

明治廿七年十二月廿七日

ドクトル、エ、ベルツ

製造發賣元 麴町區有樂町三丁目 東京ホテル

◎用法

人々の好みによりては水を入れて適宜にのばし味噌汁の如く鍋にてあたゝめ醬油又は味淋を加へ豆腐。野菜の類を煮て食するときは至極妙なり。

世光

一冊金五錢

第三號二月十五日發兌

社說　論說之栞　道　雜錄　家庭　評論

傳道之意義○帝國軍隊と基督教
有神的證據に就て○學問の應用○宗教的情死○至樂論
基督と群衆○主之祈
偶感錄○霽ふゞき○半面之開化○造物主と萬有の合同
武士の妻○衛生談
雜報○廣告

東京小石川區同心町廿七番地
發行所　世光雜誌社

婦學 裏錦

一冊定價六錢◎外に郵税一錢を要す◎毎月十五日發刊◎毎號六十頁以上

●第廿八號（要目）（二月十五日刊行）

●校舍と家庭
●經濟界に於ける地位
●夢中の楷梯
●家庭叢談
●女皇クヽステナ
●故園の友を懷ふ
●料理雜記
●僞皇子
●墓上の月

石川喜三郎
賀古保吾郎
翁草女史
茶煙子
郁子
なにがし
石川残月
加雲生

東京神田區駿河臺北甲賀町十三番地
發行所　尙絅社

鈴木弘恭大人講述

第六版 百人一首講義（附錄小倉てびき）

正價金廿八錢
郵税金四錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第五版品切に成りたれば玆に第六版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〳〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すとを得る至極重寶なり（女學雜誌社發行）



三ヶ月用　錫器入　金二十錢
一ヶ月用　陶器入　金十錢
半ヶ月用　陶器入　金五錢

夫れ齒は人生榮養上の最も大切なる者にて之れを保全するには齒磨の効多しとす然れども能く撰ますして猥に用ゆべきに非らず方今幾多の齒磨中に陰然首領と仰れたる我が此の**大博士**（ねりはみがき）は醫學的にして專ら純良の藥品を以て精製せし天下無二の齒磨なり人常に之を用ゆれば衛生上最も有益にして七ッの德あり

其一　齒を白くして磨滅の害なし
其一　むし齒口熱の患ひを除く
其一　口中の悪臭を去り齒くさを治す
其一　舌唇のあれる患ひなし
其一　齒しほを去り齒の根を堅くす
其一　口中を清くし食物の味を能くす
其一　咽喉に入りて害なく胃腸を健にす

四方の貴客御試用の上大博士の（ねりはみがき）有効無比なるを御吹聽の程偏に奉希望候

東京市日本橋區本町四丁目十八番地
藥種問屋　松本伊兵衛
電話千五百三十四番

各府縣下藥店小間物店に於て販賣す松本製を注意あれ

廣告

戲曲

桂吾郎

阿波鳴門左衛門著

一册十錢 郵税二錢

其評の一(國民之友)

桂五郎と題する脚本一名題して魂迷月中刄と云ふ全篇通じて序幕第一、二、三、四、五幕に分ちたり趣向已に悲慘を以て主となす近時脚本の流行稍衰へんとして文運却つて變革の兆あり桂五郎の悲劇或は之を劇塲に演ぜんとするに多少の差支なきか然れども其文辭と趣向とは必ず世に愛遇せらるべし(國民之友)

其評の二(青山評論、言智生)

風に櫛り雨に沐浴し、攻取戰勝天下に敵なく、運籌帷策勝を千里に決するものは是我が遠征の義軍ならずや、而して一征一伐必らず捷報を齎らすの故を以て同胞國民の戰勝に醉ふ亦當然のことなり、夫れ人一事に熱中すれば他事を忘れて顧みざるは是れ數の免かれざる所、現時我國民の文學を顧みざるの觀ある、或は顧みるに暇あらざる豈夫深く咎むべしとせんや、然れども知らずや文武並び用ゆるは是治道の要なるを、此時に當り文學豈夫れ忽にすべけんや。

頃ろ女學雜誌社「桂五郎」なるものを出す、自ら稱して、悲劇魂迷月中刄と曰ふ兩々相對比すれば本書の概、殆んど察了するを得べしと雖も今試に其大要を述べんに「桂五郎なる獨逸歸りの一軍醫或病院に奉職中、同看護婦たる上田涙子と因みある間柄となり、互に胸を焦しけるが、上官宮城純なるもの亦竊に涙子に思ひを寄せ居ければ、桂をなきものにせん者との考よりして之を失職せしめ、而して桂は其叔父なる(實は亦吾良の許嫁なる民子の父)森定行方に在る中、涙子は遺恨よりして亦も宮城より癲病毒藥を飮まされ其親友なる澁谷雪子なる看護婦に世話され終に澁谷の宅にて相果てたるを聞ける桂は殆んど狂氣の躰となり、彼宮城は亦も獸狀を雪子に寄せけるも遂げ得ずして是も亦辭職して町醫となり、桂は叔父より頻りに相續のことを勸めらるゝを厭ひて、父の菩薩寺なる大淨寺の一書院に引移り、民子後を慕ふて行き桂の過ちよりして一命を亡ひ、警部巡査の臨席にて宮城よりの撿死を受けて事濟まんとせしを桂吾良父の仇、涙子の敵なる宮城の逃亡せんとするを追ふて終に之を相果して自らも絶命するに至る迄」を仕組みしものにて全曲を五幕に分ち、夢醒後の獨語を以て全篇を起し、篇中亦幽靈との對話云々より幕の端緒を開くもの多々、夢寐の人生を寫すを目的となせるが放とは云へ餘りの感を起さしむ、然れごも此れ却て是篇の魂迷の名ある所以か、夫れ戯曲は人事世態を主觀として寫し其間一點、作者の主我的觀念を雑ゆべからず、とせば著者が始めより桂をば文明流の人物として寫し置きながら敵打ち云々のことを以て之に仕組みしは聊か著者の主我的觀念の然らしめしやの疑なき能はず。巣林子の「天の網島」中の小春、治兵衛は立憲時代の道德法より觀察せば或は三文の價なき人物なりと、評し去るべきありとせんも、其各自己の立てし見地もて作れる道德の本然を全ふせし點に到りては古來の忠臣が君の馬前に骸を晒し、或は節義を守りて烈婦賢妻と呼ばれたるものと何ぞ異らんや、然り而して一般「ドラマ」と稱するものは一方に誠實、善良なるものと、此に對して放肆齒莽の人物を以てし、阿修羅が戰敗の餘憤怒に堪へずして金翅鳥の卵殼を踏破する刹那を横出するものとせば、人生の賴み少きを知ると同時に自然の大勢力に服從して進まば賴る邊なき人生を造花の子と爲つて怡々として渡り得るを解せしむるの、人生の寫眞なりとし、之を鏡として此著を見ば如何、吾良、民子は是れ著者の吾良、民子に非ざるか、吾良が獨り運命を託つ段、前には神を信ずるを劣りとせる民子後に万物を絶望の谷、涙の海と見るに至ると、など本書廿子の人物も著者の脚色にて稍赤白を變ぜしやの感なき能はず、然れども墳墓の傍靜に其身の來歷を話すが如き思考より見れば、著者胸中の吾良、涙子には云ひ分なかりしならんも、表は居る各自立脚の身地たる道德の本然に於ては缺くる所ありと云はざるべからず。其他臺詞の上に於て曰はゞ亦多少の瑕瑾あるべし、是れ著者自身と雖亦諾了することならん、或は考案脚色の上より論ずれば彼此のこともがなと思ふ所存すべきなり。

透谷子逝て純愛を說くの詩人なく、世評如何なるにもせよ戀愛の至情を叙せる「宿魂鏡」に繼ぐべきの書出でず、今の藝林に翩々たる、語を學ぶ鸚歌の如く、文彩鸜鵒山鶏の如く勁鷙搏擊鷹鸇の若き徒輩をして猥りに戀愛の聖を穢さしむ、彼の詭隨雷同滔々乎として群瞽の相に從ふが如きもの何ぞ與に爲するに足らんや、且つや文學に渇する今日の如き時に當りて此書を見るを得、假令千百の蕪雜ありとも、豈悅んで迎へざらんや、況んや本書は愛及之に附ける人情に於て一の解釋を與へたるに於てをや、況んや又批評の眼を以てする如きの完全は到底得べからざるものなるに於てをや抑も文學なるものは人生に屬する諸現象の研究なりとせば本書の値亦少なしとせざるなり、吾人の本書を讀み悅んで此に紹介する所以此にあり、酷烈慘憺を極めたる悲劇＝一大壯觀を見んと欲せば乞ふ本書に來れ、來て人生の寫眞を見よ、願くは戰爭文學をして文界を縱橫せしむる勿れ、文界若し戰爭文學の押領する處とならんには願くは之をして人生と關係あらしめよ、聊か本書を讀んで記すること斯の如し、吾人を以て本書を聲價するものと强ゆる勿れ」

若松賤子譯

クリスマス感謝の美談

祝ひうた

新刊書

一册十錢 郵税二錢

右批評の一(早稻田文學第七十九號)

若松賤子女史譯、警醒社發兌、カロル(歌子)といふ慈悲の念ふかき富家の一少女が基督降誕祭の祝日に裏の路途に住せるラグルスといふ貧家の子を悉く招きて饗應し且種々のクリスマスの贈物を惠みてよろこばすといふ單純なる趣向の一小話にして譯文あどけなく出來て面白し小供の讀物として適當のものなり原文を見ざれば深くは巧拙を評しがたけれど原文の精神を失はざらんの苦心見えたり文躰は言文一致躰今一息にして、國語といふを得べし中にも面白きはカロルよりの招待を受けてラグルス夫人が遽にその子等に禮儀作法を教へ大騷ぎして用意に取りかゝる條なり貧家のおかみさんの語氣口吻さながらに躍如たり。

右二書賣捌所

女學雜誌社

(明治廿五年三月十五日遞信省認可)

女學雜誌社出版書籍

(再版)小公子 若松賤子譯 一冊廿八錢 郵稅四錢
(六版)百人一首講義 鈴木弘恭氏講 同廿八錢 同四錢
(信神孝父)腓立比物語 櫻井成明氏譯 同廿五錢 同四錢
(鬧さき)猫と鼠 女學雜誌社編 同五錢 同二錢
吾黨の女子教育 巖本善治著 一冊十錢 郵稅二錢
木村鐙子小傳 同 前 同十錢 同
公娼可滅 同 前 同五錢 同
教育講義 同 前 同十錢 同
日本女學 同 前 同五錢 同
文法口授 鈴木弘恭君述 同十二錢 同
婚姻論 横山雅男君著 同十六錢 同四錢
產婦小兒攝生法 船越鼎太郎君著 同十錢 同二錢
邦文學 松山高吉君著 同二十錢 無郵稅
俳諧史傳 小此木信一郎 布川孫市 兩君同著 同三十錢 同四錢
善惡の岐 中島とし子著 同二十錢 同
廢娼演說 島田三郎 植木枝盛 兩君同著 同五錢 同二錢
西洋女禮 本社著 同十錢 同
小供の話 同 同十錢 同
兒育草 同 同八錢 同
藝者と手掛 炭谷小梅女著 同十錢 同

新刊書籍

戯曲 桂五郎 阿波鳴門左衛門著 十錢 郵稅二錢
高橋傳五郎 巖本善治編輯 五錢 郵稅二錢
偉人物 山月子稿 二錢 郵稅二錢

發行所 女學雜誌社

本社取次書籍

大奥の女中 (上中下三冊正價一冊卅錢郵稅六錢宛)
日本の婦人 (一冊正價五十錢、郵稅六錢)
女子の本分 (一冊定價廿五錢、郵稅六錢)
透谷集 (一冊定價三十八錢、郵稅六錢)

書信は惣べて下六番町六番地宛にて御郵送被成下度候

巖本善治

女學雜誌定價表

前金	壹冊 定價 金拾錢 一年 前金 金壹圓 (無郵稅)
廣告料	一行 (廿七字詰) 一回 前金十錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道德なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年十二月廿四日印刷
明治廿八年十二月廿五日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場 (電話十九番)

(明治廿五年三月十五日 遞信省認可)

女學雜誌定價表

前金	壹冊定價 金拾錢 一年前金 金壹圓 (無郵稅)
廣告料	一行一回(廿七字詰)前金十錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月廿四日内務省許可
明治廿八年十二月廿四日印刷
明治廿八年十二月廿五日發行

發行兼編輯者 巖本善治 東京市麹町區下六番町六番地
印刷者 根岸高光 東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地
發行所 女學雜誌社 東京市麹町區下六番町六番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工塲 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 (電話十九番)